

---

# 永遠に.....

Ruka

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永遠に……

### 【著者名】

Ruka

N53800

### 【あらすじ】

「もう私たちは元の姿に戻れないわ」 そうコナンに告げた灰原。それから一人のまわりの雰囲気は険悪なものになっていく……。CPはコ哀です。

「工藤君……」

「おう灰原。どうした?」

コナンは今日、帝丹小学校から帰るとき、哀に「話がある」と言われ、帰宅してから蘭にあてていつものとおり「博士ん家でゲームしていくね」と置手紙を残し、探偵事務所をぬけ出してきた。なんだか哀のようすがいつもと違つたので急いで阿笠邸に来たが、彼女はなかなか話を切り出そうとしない。

「なんだよ、話つて」

なんだか哀の様子がおかしい。そう思つてコナンは首をかしげた。

「解毒剤、もう作れなくなつたわ。永遠に」

「え?」

彼女の突然の告白。コナンは頭の中が真っ白になつた。

「な、んで」

「……FBIが鳥取にある組織の本部を壊滅させたらしいわ。……

だけど、組織のボス あの方は、A P T X 4 8 6 9 のデータが流出することを防ぐために本部ビルを爆破・データを持ったまま自殺……。本部ビルの場所は鳥取の中心部で、多くの死者が出たらしいわ……。今、ニュースで報道されてるでしょ？ 幸い、F B I が態勢を強化していく、暗殺を繰り返していた黒の組織の本部だってことは世間には知られていないけど……。それで 」

「その爆破の衝撃で薬のデータは全て消失。組織の上部の人間や高い能力を持った学者などは全員本部ビルにいたため爆破に巻き込まれ、死亡。つまり、あの薬のデータは完全にこの世から消え去った。だからもう俺らは元の体には戻れない……。つづーことか？」

コナンが途中で口を止み、哀より先に真実を告げる。

「……ええ。本当にじめんなさ 」

「いいんだ」

「コナンが哀の謝罪を止めた。それでも何か言おうとする彼女に、もう一度きつぱっと告げる。

「いいんだ、別に。元の体に戻れないのは、お前のせいじゃねーし。いつまでもぐだぐだ言ってるなんて嫌だろ？」

「でも 」

「お前や俺がいくら強く願つても、それは叶わないだろ」

急に、コナンの声質が変わる。

「……江戸川、君？」

「いくらおめえが謝つたって、もう永遠に工藤新一には戻れねえんだ……！」

「コナンの激昂に、哀はびくつと震えた。

「「」「め……なぞ」

「もういいよ」

「コナンはそう言ひ捨てる、ドアを閉め阿笠邸を出て行った。

残された哀は壁に寄りかかり、ずるずると床にへたりこんだ。

その様子を、影から博士が見ていた。

・ · ·

「コナン君と灰原さん、最近全然話していないですよね……」

あの件から一週間が経ち、全く話さなくなつたコナンと哀を心配して、少年探偵団の歩美、光彦、元太の三人は放課後、教室で作戦会議をしていた。

「うん……ケンカでもしたのかなあ？」

「あ。もしかして、この前コナンが灰原の給食のプリン食つたから

怒つてんじやねえのか？」

光彦と歩美はしばし沈黙した。

「……元太君、二人はそんなに子供じやありませんよ」

「そりだよ。それに、哀ちゃんがプリンいらな」って言つてたから「ナン君がもらつたんだもん！！」

哀は「プリンとか、甘いもの食べると太るから」「ないわ」と言つていた。実際、彼女は全然太つてないのだから、甘いものもちょっとは食べればいいのに、と歩美は思つ。

「わ、悪イ。でもよお、あの一人がケンカつて、よっぽどの」ことがあつたんだろうな」

元太の意見に一人もうなづく。

「そりですね……。でも、今回は「ナン君が一方的に怒つてる感じですけど……」

「あ、歩美が哀ちゃんに『なんで「ナン君とケンカしたの？』って訊いたら、哀ちゃんすごく難しい」と言つてたよ」

「え、灰原さん、なんて言つてたんですか？」

「えーとねえ、確かに『残念だけど、それはいくら吉田さんでも教えられないわ……。唯一言えるのは、私は彼に一生を費やして償つても許されない、大きな罪を犯した、つてところかしらね……』って。『ゆいいつ』とか『ついやして』とか『つぐなつても』とか、

「どうこいつ意味だらうね？」

元太が、すこしく深刻そうな、難しい顔をした。

「……よくわかんねえな」

「灰原さん……ミステリアスですね……」

「……あ、わかった！ 灰原のヤツ、この前コナンの海藻サラダ取つて食つてた！！ あれはコナン絶対怒つてたぜ。灰原がムリヤリとつてつた感じだつたし」

二人はしばらくの間無言だつたが、やがて歩美が口を開いた。

「……元太君、どうしても食べ物のことから頭が離れないんだね」

No.1 永遠に（後書き）

はじめまして Rukaです。

初投稿です。ここまで読んでくださった心の広いお方、どうもありがとうございます。

えー、文章書く能力ないので超意味不明だと思います。……スミマセン。

これからも投稿していくので、できれば見捨てずに見守ってください。

九年後。

少年探偵団は高校生になっていた。コナンと哀はあれからずっと微妙な関係のまま過ごしてきた。

光彦は私立の名門校に合格した。ここからそんなに遠くはないが、学校が違うとなると五人で会える時間はかなり少なくなる。

他の四人はみんな同じ帝丹高校に通うことになった。今日は帝丹高校の入学式だった。

「うわー、すっごく緊張するね」

吉田歩美は高校生になつても前と変わらず明るく活発で素直な性格の子で、男子からもかなりの注目をあびていた（いまも「コナン一途」）。

「確かに、こんなにたくさんの人人が入学するんだなって思うと、緊張するぜ。まあ、これからもいろいろよろしくな！ 歩美、灰原！」

小嶋元太は相変わらず太ってはいるが、中学生のときにラグビー部だったため、がつちりとした体型になつていた（いまだ歩美に片想い中）。

「ええ、よろしく、二人とも」

灰原哀。どこか冷めた態度に落ち着いた雰囲気、ウェーブがかかつ明るい茶色の髪。その容姿の美しさに早速周囲の注目を集めている。

「ところで、口ナン君は？」

「ああ、彼ならさつき放送で職員室に呼ばれてたわよ。多分、新入生代表の挨拶でもするんじゃない？」

「まじかよ、すげーな！」

歩美はいつも、なぜ哀は口を利かなくともこんなに口ナンのことがわかるのだろう、と不思議に思つ。

「哀ちゃんって、ホントすげーよね」

「？ なにが？」

元太は、いつの間にか新しい友達と一緒に体育館の入り口の方で楽しそうにしゃべっていた（移動早つ！ 瞬間移動！？）。

歩美はくすりと笑つた。

「私、いまだも口ナン君の考えてる」と一番理解してるのは哀ちゃんだと思つてるからー。」

「やつ？ ありがと」

哀がふんわりと笑つて軽く受け流す。

歩美の第六感によると、この親友の想い人はコナンのはずなのだが、出会つてから九年経つても全くそんな態度を見せない。

「コナンのことは好きだが、哀のことはもつと好きなので、歩美はこの一人の恋を応援することにした。

「哀ちゃんとコナン君、お似合いだからね!」

『新入生、入場』

突然アナウンスが入り、体育館の扉が開けられる。新入生たちは一気に気を引き締めた。

「ねえ、哀ちゃん。コナン君まだきてないよね?」

歩美が小声で尋ねる。

「そうね。でも、彼のあの俊足なら余裕で間に合ひつと思つわよ」

新入生たちが次々に体育館へ入つていく。残りの生徒が半分をきつたとき。

「歩美、歩美!」

後方で歩美の名を呼ぶ声が聞こえ、彼女が振り向くと、そこにはコナンが立つていた。

「コナン君!」

「コナンの登場に、歩美が声を上げる。

「確か俺と歩美、同じクラスだろ？ 六組……だっけ？」

「うん、そうなの。哀ちゃんも同じクラスだよ！ 元太君だけ違うのがちょっと残念だけど……」

歩美がしんみりと呟つ。

「元太は？」

「むいひ」

「コナンの問いに、哀が答える。こんな風にして、コナンの疑問に對し哀がさりげなく答える、という光景は小学三年生のときくらいからよく見る。コナンは哀の問いに返答しないのだが。

「へえー、あいつもう友だちつくつてんのか」

「ていうか、コナン君くるの遅い…… いま、五組の名簿二十九番の人に入場したところだよ！」

「え、まじ？ あつぶねえー。俺名簿七番だから、俺の番まであと十八人か」

「ぎりぎりセーフだね」

「うして一人が仲良く話しているのを見るのは中学でもよくあつた。しかし、二人が話すたびに歩美のところに「コナン君と付き合つてるの？」という質問が大量にくる。歩美はそのたびに否定するのが大変そうだった。

高校でもどこでも、やはり美男美女が話していると羨うらうへ、周りの人たちちらちら見て「の人たち付き合ってるのかなー」とこそこそ話していた。

「ほら、コナン君そろそろ体育館入り口の方行つといた方がいいんじゃない? いま、五組の四十番、渡辺君が入場したところだよ」

「おー、やうだな。じゃー」

「コナンが去ると、歩美はくるつと勢によく哀の方を振り向いた。

「哀ちゃん、もしかして私とコナン君が話して、嫉妬してる?」

歩美は口許に手をあてて、こまつと笑つた。

「別に、しないわ

嘘だ。咄嗟に返せた自分が凄いと思つ。確かにいま、歩美に嫉妬していた。

「えー、ホントに? ま、いいや。それより哀ちゃん、今度から呼び捨てで呼んでもいい?」

「ええ、いいわよ……。え?」

実は生返事（「コナンのことを考えていて）をしていた哀は、話の内容をよくよく考えてみて、「え?」と疑問に思った。

「だ・か・ら! 今度から『哀ちゃん』じゃなくて『哀』って呼ん

でいい?」

「ええ……?」

「だめ?」

「…………別に、いいわよ」

私はこの顔に弱い、と哀は思った。

「ホント? やつたあ! じゃあ哀も今度から私のこと『歩美』って呼んでね」

「…………。ええ、わかったわ

「じゃあ、これからもよろしくね、哀」

「へへへへへ

「あーつー、哀、もう哀の番だよー、いま一十五番の野村さんが出て行つたとーー、哀、一十七番でしょ?」

歩美の『』とおつとおつ、もう哀の番だった。

「こつてらつしゃい。バイバイ

「さつね。じゃ、行つてくるわ

彼女は入り口へ向かい、扉をぐぐつた。体育館の壁際には、紅白幕が付けられてくる。さつと辺りを見まわすと、全校生徒は千一百

人程、所々に服装や髪の色が派手な生徒がいるが、他の学校に比べれば風紀のいきどどいているところだといふことがわかつた。

( 結構素敵な学校ね )

体育館の通路を進み、新入生たちの座っているところにたどり着く。哀は自分の座席を見つけると、さつと腰を下ろした。

しばらくして、歩美や七組の元太などが到着し、入学式が始まつた。

No.2 帝丹高校（後書き）

どーもこんにちは！ Rukaです。  
永遠に……の投稿今回で2回目です！  
また意味不明な文章です……。  
次回もよろしくお願いします。

(退屈だわ……)

哀は欠伸を噛み殺して辺りを見まわした。自分と同じく、コナンや元太も眠そうにしている。

(あの推理オタクさんは昨日の夜、また飽きもせずに血生臭いミステリー小説を読んでいたのかしら?)

そんなことを思いながら歩美に手をやると、彼女も必死で睡魔と闘っていた。

長つたるい校長の式辞（しかも超つつかえてた）が十五分位してようやく終わり、司会の教頭が次のプログラムを告げる。

『新入生代表の挨拶、江戸川コナン』

マイクで「コナンの名前が呼ばれる。コナン、という名に、ほとんどの新入生が唖然とし、次いで起き上がりてくる笑いを必死に堪える。後ろにいる一、三年生の方からはいくつか笑声が聞こえた。哀も、初めてこの名前を聞いたときは、もつとマシな名前が思いつかなかつたのかと呆れた果てたものだ。

しかしその笑い声も、コナンが壇上に上ると、途絶えた。みな、

彼の顔を見ると「かつこーいー！」「うわ、超イケメン」などと小声で囁き始めた。コナンは最近、学校で眼鏡をはずしている。その聰明な瞳と、ルックスのよさ、さらに成績優秀・運動神経も抜群にいとなると、周りの女子は放つておかないだろう。すでに女子たちは式の途中だといふことも忘れてきやあきやあ近くの友だちと話し始めている。

だが、ここまでコナンが完璧だとなると、今度は男子からの妬みが酷くなるよううに思う。もうすでに男子の中ではコナンのことを睨みつけている人間もいる。だが、そんな人間もコナンと話せばたちまち彼への妬みは消えるだろう。コナンは新一だったときと違つて、控えめな行動・言動をとるようにしていた。そんな人柄のよさも、コナンに人気がある要因の一つであった。

### 『静黙に』

教頭が騒いでいる人を注意すると、周りは再び静かになり、この空間に緊張感が舞い戻ってきた。そして、コナンの式辞が始まる。

「答辞。この春のよき日に、帝丹高校に入学できたことを、私たちは嬉しく思います」

「コナンの声は聞いている人を心地よい気分にさせる（歌つているとき以外）。哀は、コナンの声が好きだった（歌つているとき以外）。

「コナンは先ほどの校長の話よりも遙かに聞き取りやすく、全くつかえずには話していく。

「これから、部活に勉強によりいっそ勵み、よりよい高校生

活を送つていきたいと想います

コナンの挨拶がもう少しで終わる、というとき、「今度は保護者席から歓声があがつた。生徒たちも何事か、と後ろを振り向く。

「ねえ、あれ藤峰有希子じゃない?」

哀の近くの新入生がしゃべつた。

「だれ? その人」

「私も詳しきは、知らないんだけどお母さんが大ファンで。確か、三十年くらい前に女優として一世を風靡し、二十歳での世界的に有名な推理小説家・工藤優作と電撃結婚、ナイトバロンそして引退ナイトバロニス。それから、アメリカでたまに闇の男爵の妻、闇の男爵夫人としてテレビにでてるらしいよ。それと、確か息子がいて。知ってる? 工藤新一っていう人」

「あ、聞いたことがあるよ。私、小さかったからあんまり覚えてないけど、確か高校生探偵として有名で、難事件を次々解決。でも、行方不明になつて、しばらくしてから両親が死亡通知を出したって……」

「……」

「そうそう。でも、何でここにいるのかな? もしかして、このなかに工藤新一以外の子供がいたりして?」

「わー、同じクラスだったりどうしよう?」

そんな会話を聞きながら哀が壇上を見ると、コナンが思いつきり顔を引きつらせていた。「なんでここにいんの?」という顔だ。幸

い、監護者席に注目していくと、口ナンのやの顔を見ていくのは良だけのようだ。

『静かに』

教頭にまた注意されると、みんながいっせいに前を向く。みんなが姿勢を正したところで、口ナンは言葉を続けた。

## No.3 入学式（後書き）

今回は入学式編です。

ふふふ……「ナンはもてますな

次回もよろしくお願いします。

「はあ～、やつと終わつたね」

歩美が伸びをしながら哀に言つた。

式は無事に（～）終了し、コナンたちはいつもの四人のメンバーで歩いていた。

「そうね」

「ていうか、何で俺だけ別のクラスなんだよー？」

元太が不服そうに言つた。それをコナンが慰める。

「そんに怒つてんじゃねえよ、元太。この学校は一年」というクラス替えだし。来年、一緒になれるかもしだれねえだろ？」

「でもよお」

元太が不満を言おうとした、そのとき。

「きやーーーー、亞実、あれ、コナン君よーーー。」

「え、うわーーー。」

「逃げよつー 私、今髪型最悪なの！…」

「私も今日化粧してきてないー！」

四人の傍にいた見知らぬ一人は、叫びながらトイレにかけこんで  
いった。

「…………」

「名探偵さんはもうすでに有名人らしいわね」

哀が皮肉を込めて言つ。

「……有名人で言えばよ、式の途中、なんかすっげえ有名人がきた  
らしいぜ？」

「あ、歩美その人見たよ！ すっごく美人さんだつた！ なんか、  
どこかで見たことあるような顔だつたけど……」

「見たことある顔？」

元太が不思議そうに言つ と

「コーナンちゃん」

「わつー？」

突然、コナンの背後にだれかが抱きついてきた。

「ひつやしじぶつ～」

「母さん～。」

「口ナンに抱きついてきたのは上藤有希子だった。

「あー、思い出した！……」の人に、仮面ライバーの映画の試写会のときによいた人だよ、元太君～。」

「え？ あー、あのときの口ナンの母ちゃん～。」

「いや、母さんじゃなくて親戚のオバサ……お姉さんだよ。」

「口ナンが「オバサン」と呼んでいたの。」

「でも、口ナンが「母さん」と呼んでいたよ。」

「口ナンがぎくつとある。そういう意味で「母さん」と呼んでしまったかもしれない。」

(やつべえ……つに癖で……)

「えつと……それは……」

「養子になつたのよ、彼は」

え、と口ナンが振り返ると、涼しい顔をした哀が口を開いていた。哀が有希子に田で合図を送る。

「そ、そうなのよー。ホラ、私息子が死んじゃつたじゃない？ そ

れで、コナンちゃんの間両親が亡くなつたつてこいつから……、  
養子として引き取ることにしたのよ」

「やつなの？　コナン君」

歩美が不安そうに聞く。

「え、ああ……。寒はやつなんだ」

「やつが……大変だつたんだね、コナン君」

「え、じゃあコナンは？」人と一緒に外国にこつまつのかよー？」

やついえばそつだ、と気づいたときにはもうすでに遅かつた。歩  
美は田にやつすらと涙をためていた。

「……ひ、せつからくコナン君と同じ高校に入学できたの……離れになつちやつの？」

ぽん、と歩美の田から涙が落ちる。

「ちよつと新ひやん、どつにかしなきことよー」

有希子が小声でコナンを叱責する。

「どつにかつて言われても……」

コナンと有希子が互いに困惑していると、哀が口を開いた。

「彼は、外国へ行かないわよ」

「え？ ホント？ …… 哀」

「ええ」

歩美が目に涙をいっぱいにためて哀を見る。哀はさりげに言葉を続けた。

「戸籍上は親子になつたけれど、彼もせつかく日本の中学校に受かってたんだし、これから新たに他の国の高校を受験しなおすなんて、そんなことしないわ」

「よかつたあ。コナン君がいなくなつちゃつたらどうしようかと思つたよ」

歩美はほつと胸をなでおろした。

「でもよ、何で灰原がコナンの家のこと、そんなに詳しく知つてんだ？」

「え？」

「コナンと哀は口を利いていない。それなのに、なぜ哀がこんなに詳しくコナンの家の事情を知つてているのかと元太は疑問に思つた。元太の問いに哀はぐつとつまる。

「えつと……それは……」

「博士からきいたんだろ」

突然の「ナナンの助け舟に」、一同唖然とする。これまで、哀が「ナナンをさりげなく助けることはあつたが、「ナナンが哀を助けることはなかつた。

「つかの母親、博士と仲いいからや。多分、博士に養子のこととかいろいろ教えたんだる。んで、ここのつは博士からきいた、つていう」

さつきまで不審に思つていた元太も、いまの「ナナンの答えを聞いて納得したようだつた。

「へー。やうだつたんか」

有希子がちらりと「ナナンを見る。その顔はにやけていた。

「し・ん・ちやん」

有希子は「ナナンに近づいて耳元で囁いた。

「うわっ……なんだよ、母さんか。びっくりした

「なんだよとは失礼ね」

有希子がムッとする。

「ところで新ちゃん」

「あ?」

「もう、ラブラブじゃない! いいわよ。母さん、哀ちゃん

んならお嫁にもうつても

「はあ？」

イキナリ何を言いだすのだ、この親は。

「お一人さん、拳銃はいつ？ もうトーントして、手を繋いで、キスも当然したのよね？ あ、もしかしてその先まで進んでたりする？ 母さんは別にいいけど、哀ちゃんに迷惑かけちゃダメよ！ 学生のうちにできちゃった結婚なんて……。まあ確かに、早く孫の顔が見たいっていう想いはあるけどさ」

「か、母さんちよい待」

「あ、もしかして哀ちゃん、もう妊娠してたりする？ あ、だから哀ちゃんあんなに不機嫌そうな顔してるんだ。もしかして、コナンちゃん、嫌がる哀ちゃんをムリヤリ……！？ いやーー！ ヘンタイ！－！ 母さん、そんな子に育てた覚えないわよ！ まあでも、コナンちゃんも哀ちゃんも頑張ったわね！ でも、親になるには相当の覚悟が」

「だーもーーー 母さんストップー その妄想劇場を止めるー まず第一に俺とアイツは付き合ってなんかいねえからー だからデートもキスもそれ以上のこともしてないし、灰原は妊娠してないからー 機嫌悪そうなのはいつものことだしー それに、俺とアイツはこの九年くらい、ずっと口利いてねえし」

「え？」

有希子は愕然とする。

「嘘よー。」

「嘘じやねえー。」

「絶対嘘よー。だって、哀ちゃん前と変わらず新ちゃんのこと見てるし、わざわざだってあんなにお互いのこと助け合ってたじゃない！あんなにお互いのことわかつててるのに、新ちゃんは何で自分の気持ちを認めないの？ 哀ちゃんは、あなたに無視されても、酷い言葉かられても、ずっとここまで我慢して耐えて、新ちゃんのこと想つてきたのに……」

「…………」

「ナノは呆然とした。あの母が、ここまで言つなんじ。

「 私、もう帰るけど、ちゃんと哀ちゃんの気持ちを考えて答えだしなれこよ。じゃあね」

そうこうと、有希子はショートヘアの髪をつか、学校を去る保護者たちにまじって外へ出て行った。

No.4 養子（後書き）

こんにちは、Rukaです！

今回で永遠に……の投稿4回目となりました！

個人的には有希子さんのキャラが大好きです。  
なので、今回一番気に入つているところも有希子さんのところです。

次回もよろしくお願いします。

「みなさん、おはよ！」<sup>う</sup>ひこです。私がこのクラスの担任の久住優果です。まだ教師になつて三年目なので失敗も多ことあります。が、みなさんよろしくおねがいしますね」

「ナンたち六組の担任になつたのは、二十五、六歳くらいのまだ若い女性教師だつた。顔立ちも結構綺麗で、男子のほとんどが見惚れています。

「では、みんなのことをよく知りたいので、自己紹介していくください。じゃあ、名簿順で。一番の浅井さんから……」

優果が声をかけ、一番、二番、三番 と、みんなスムーズに自己紹介をしていった。

が、七番の人になると。

「帝丹中学校から来た江戸川コナンです。特技はサッカー、趣味は推理小説を読むこと。みんなよろしく

たつたこれだけの、ごく普通の挨拶。だが。

「きやー、コナン君かっこいいー！」

「おい、あれ新入生代表の挨拶してたやつじゃねえか？」

「同じクラスだつたんか……」

「うひちむこて~」

「やべえ、超有名人じゃん。俺あいつと同じクラスなのかよ」  
などなど、多様な意見が一瞬のうちに飛び交う。先生もその人気ぶりにしばらく呆然としていたが、やがて我に返ると生徒たちを注意した。

「はいはい、みんな江戸川君がかっこいいのはわかるけど、もうちょっと落ち着いてくださいね」

優果がそういい、再び自己紹介が再開する。たまにかわいい女子（哀よりは劣る）がいたり、かつこいい男子（コナンよりは劣る）がいたりすると、みんな歓声を上げていた。

「じゃあ、次。二十七番の灰原さん」

「はい」

哀が席を立つと、皆がその美貌に絶句した。

「帝丹中からきた灰原哀です。得意分野は化学。よろしくお願ひします」

哀は「うわ~、普通の血」を紹介をしたつもりだった。それなのに。

「うわ~、やつべ。超美人」

「足細く！ きれぐ！」

「灰原さん！ こっちむいてよ～」

さつきまでの人たちとは比べものにならないくらいの歓声があがつた。コナンのときと比べてもひけをとらない。

(……化学好きな人が多いのかしら?)

哀はたまごと闇蓮のた解説をして、席についた。

それからは、予想していたとおり歩美のところで歓声が上がり、自己紹介と学習目標決めをして一時間目は終了した。

一 ねえねえ、灰原さんてハーフなの？」

休み時間になり、哀の机の周りには男女問わず人だかりができるといった。哀がコナンや歩美のほうを見ると、彼らのまわりもすごい人數の人がいた。

「ええ」

„...רְאֵלָדָרְאַלְמְרִינְ...“

「イギリスと日本」

「へへ、かつここいね！」

（めんぢくせ……）

ハーフだから、何だというのだ。別にどうでもいいだらう。アメリカにいたときはこのアジア系の顔立ちでいじめられ、中学のときは「お前その髪染めてんだろ?」とか先輩にイチャモンつけられた。哀の今までの人生の不幸の原因は「ハーフであること」というものが大半を占めていた。ジンも異様なほどこの髪に執着していた。

でも、ハーフでいいこともあった。自分では覚えていないが、小さい頃母に「志保のその髪の色はお母さん譲りね」と言われて志保はとても喜んでいたと姉が言っていた。

それと。

（……小学生の頃、あの名探偵さんに「オメーの髪、綺麗な色だな」って言われたことが一番嬉しい……）

そのときのこと思い出しても、哀は顔を少し赤らめて自分の髪を触った。

・

あれは確か、小学一年生の夏頃。

私たち少年探偵団の五人のメンバーと博士で群馬のキャンプ場にいった。

昼間カレーを作ったり、トランプをしたり、虫捕りをしたりして遊んで疲れた普通の子供の三人（歩美、光彦、元太）は夜になるとぐっすり寝てしまった。

普段は〇時をこえないと眠らない私は、当然夜九時などに寝れるはずもなく、ふらふらとテントを出た。

（あの子たちはともかく、工藤君や博士はよくこんな早い時間に寝れるわね……）

あの一人も自分と同じく夜型だと思っていた哀は、ちょっとがっかりした（あとで博士に聞いたら「わしは寝よつと思えば昼間でも寝れるんじや」とか言っていた）

テントの周りをふらふらと歩いていると、ちょうどいいところにベンチを見つけて、私はそこに腰を下ろした。空を見上げれば、キラキラと輝くものが無数にあった。

「 星……。綺麗……」

上を向いてデネブ、ベガ、アルタイル……などと知っている星を探していく。

「あれ……。アンタレスは……？」

哀は首をめぐらしてアンタレスを探したが、なかなか見つからない。組織にいるとき、窓際からあの赤い星を見ると、自分と一緒に色だと安心できた。

(……そういえば、星を探すすべは組織で習わなかつたわね……)

組織で必要な知識といえば、薬品の研究・開発をするのに大切な知識。同じ理科でも星などの観察をする科学は、あまり教えてもらわなかつた。

(光り輝く星は、闇の黒に染まつた私なんかには似合わないわ……)

「ナンもそ、漆黒に染まつた私を、彼が暗い長い道を明るく照らして、輝く白銀の道へと導いてくれる。

「アンタレスはあつちだろ?」

不意に、後から声が聞こえて私はハッと振り返つた。

「江戸川、君……」

振り向くと後ろには工藤君がいた。

「まつたく……びつくりさせないじよ。寝たんじやなかつたの?」

「おひ、寝たフリしてた」

「寝たフリ? なんでもた」

「お前が、どつかに行くと思つたから」

「え?」

私は、その言葉を言ったときの江戸川君の横顔が本気で悲しそうだつたので、思わず聞き返した。

「お前が、あのバスジャックのときみたいに、またなんかやらかしそうだつたから……」

「工藤君……」

その表情を見て、私は心に決めた。

「大丈夫よ。もうあのときみたいに逃げたりしないわ。だつて、私がいなくなつたら、誰があなたの解毒剤をつくるの？　解毒剤をつくるのは、私にしかできないわ。だから、安心して。それが、私にできる唯一のあなたへの償いだから。あなたのことを放つてどこかへ消えたりしないわよ。大丈夫……」

自分の決めたことを口に出して、もう一度強く心に刻み込んだ。

## No.5 灰原哀の記憶（後書き）

どーも、Rukaです

今回はちょっと「哀風味出してみました  
えつと、今回星の名前が出てきましたが、私自身は全く星に詳し  
くありません。アンタレスとかも、結構適当です。哀が見つけら  
れなかつた星をアンタレスにしたのに、深い意味は全くないです。  
次回もよろしくお願いします。

「……原さん、灰原さん……」

「え？」

小学生の思い出にひたつっていた哀は、クラスメイトの女子の声で現実に引き戻された。

「『え？』じゃないよ、もう… なんか急に黙りこくれちゃって。心配したんだから！」

「あ、『めんなさい』ね」

『氣づくと、もう哀の周りにはその子しかいなかつた。哀がぼけつとしている間にみんな他の友だちのところへいつたらしい。

「あ、私ちょっとトイレ行ってくるね……」

最後まで哀の机の傍にいたその子も、トイレに行くとこづか実をつくり、哀の元から離れていった。

・

「……サンキュー」

何に対してのお礼なのかは、いまとなつてはわからない。ただ、そのときの私は、解毒剤をつくることに対するお礼だと思った。

「……私のほうこそ、ありがとうございます。おかげでアンタレスの場所がわかつたわ」

「おう。おめー、意外と星の知識は深いんだな。アンタレスって、あつちの方にあんだぜ?」

「……組織では天体観測のことにはあまり習わなかつたのよ」

江戸川君がしまつた、という顔をした。きっと、私に組織いたときのつらい記憶を思い出させてしまつたと後悔しているのだろう。

「……いいのよ。別に、今の私にも昔の私にも星の知識は必要ないわ。私、星とは無縁の関係だし。あなたと違つてね」

「……そうか? 俺は、お前と星、似てると思つけどな」

「え?」

そうこうと「ナンは考へ込むよつて顎に手をあてた。

「やうだな……たとえば……。髪、とか?」

「髪?」

私は、彼が言ったその単語を繰り返した。

「や、髪。お前の髪と星、どちらも綺麗じゃん。その髪、すっげー光反射して輝いてる。星も。だから、似てる」

そんな褒め言葉を言われたのは、生まれて初めてで。

ジンが執着したこの髪。何度も恨んだか知れないけど。でも、このときだけは。

このときだけは、この髪の色でよかったです。生まれて初めて思つた。

(……こんな昔話、思い出しても仕方ないわ)

哀は今まで何度もこの記憶を忘れようとした。思い出せば思い出すほど、コナンへの想いが強くなつて苦しくなる。でも、忘れられない。

「へへ、コナン君、推理小説好きなんだ!」

コナンの方から楽しそうな笑い声と、さつままで哀のところにいた女子生徒の声が聞こえた。彼女もやはしまつたくしゃべらない哀に退屈していたのだらつ。トイレから戻つた後は、みんなが寄つているコナンの机のところに行つたらしかつた。

「ああ。得に好きなのはシャーロック・ホームズの『四つの署名』

だな

「あ、それ俺の親父も持つてるぜ！　一回読んでみたけど、おもしれーよな！」

机のところでは一つとしながら聞いていた哀は、コナンの机の近くにいた男子生徒の放った言葉「おもしれー」に驚愕した。コナン以外にも、ホームズ好きの人間がいるのか。

「ああ、いいよな！　ていうかお前も推理小説読むんだな、平野。馬鹿っぽい顔してるから推理小説はおろか、本も読めないかと思つた」

「なんだと？」

あははは、とコナンの席の周りで笑いが起きる。それを見て、クラスの人物は、また一人、また一人、とコナンの方へ引き寄せられていく。

歩美の周りにいた生徒たちも、コナンとられたようで、歩美がふすくれた顔をしながら哀の方へ寄つてきた。

「もう、コナン君、歩美の友だちみーんなとつちゃうんだから！　ホント、空氣読んでほしいよね」

「まったくね」

「コナン君、人気だね。優しくてかつこよくて頼りがいがあつて。女子の友だちもいっぱいできてるね」

実は哀もそこが一番気になっていた。精神年齢が十歳も下の少女達に彼が傾くとは思えなかつたが、自分たちは刻々と元の体の年齢に近づいている。もしかしたら、彼が年下の女の子を好きになつてしまつかもしれない。

「私、哀が不安になる気持ち、わかるよ」

歩美の言葉に、哀はコナンの方に向いていた顔を歩美の方へ向けた。歩美が天使のように笑う。哀はこの笑顔に弱いのだ。

「哀、自分に素直にならなきゃダメだよ！ コナン君、かつこいいし、頭いいし、運動神経いいし、性格いいしで、倍率高いんだから！ もっとアピールしないと、コナン君一生哀の気持ちに気づかないよ！」

やつひとつ、歩美もコナンのところへ向かつていった。

「……素直になんて、なれないわよ」

哀のその吐きは、誰にも聞かれるることはなかつた。

## No.6 素直になんて（後書き）

こんにちは！ Rukaです。

えー、ジンがショリーの髪に執着してたとかいうのは、私の勝手な妄想です。

コナンと哀、仲直りできるといいですね！  
次回もよろしくお願いします。

「ねえコナン君、ちょっとといいかな?」

歩美は、コナンの机のところに行くトイキナリそう言った。

「ああ、いいぜ」

急に言い出したにも関わらず、コナンは歩美がそう言つことを予測していたかのように平然と答えた。もうすでに授業の始まりの時間を探げるチャイムが鳴りそうだ。

一人して連れ立つて教室を出て行き、コナンの机の周りに集つていた生徒たちはざわざわと騒ぎ始めた。

「おい、あの二人付き合つてんのか?」

「えへ、コナン君、狙つてたのに〜!〜

「俺らのアイドル、歩美ちゃんが〜!」

みんなして騒いでいると、優果が教室に入つてきて授業の時間になつたので、みんな席に着いた。

「あら? 吉田さんと江戸川君は?」

「さほりでーす。二人でラブラブしてまーす」

一人の男子生徒がそういうと、どうと一部生徒たちから笑いが起つた。しかし、半数の生徒たちは歩美とコナンのことが気になり、少々暗い顔をしている。

「そう。じゃあ後でたっぷりお説教しないと」

そう言った優果の顔も少し暗くなったのに、哀は気がついた。

(……この人、何を )

「まったく、江戸川君たちには補習プリントを出しておきますね。じゃあみなさん、授業始めましょ」

哀の疑問も、一瞬で切り替わった優果の顔によって打ち消された。

(……やつきの暗い顔 。 気のせいね )

哀は教科書を取り出すと、心中ではコナンと歩美のことを考えながらも、表面上は真面目に授業を受けた。

・

「で? 話つてなんだよ、歩美」

「コナンは歩美に呼び出され、屋上に来ていた。今日は風が吹いて

いて気持ちいい。

(「……、サボリに使えんな）

「コナンがそんなことを考えていると、歩美が声をかけてきた。

「ねえ、コナン君」

「ん？」

「……コナン君は、哀のことでどう想つてるの？」

実はこの問いかけは、コナンの予想していたものだつた。

「そーだなー。どうして……近所の人とか、同級生とか？」

「コナンは、知つててあえて別の答えを言つてみた。

「やういうのじゃなくつて……。じゃあ、質問変えるね。コナン君はもう哀のこと許してる？」

次いで歩美の口から出た言葉は、コナンにひとつでも予想外だつた。

「許してる……つて……」

「コナン君と哀、小学校のときから全然口利いてないでしょ？ 哀に聞いたの、私。『ケンカでもしたの？』って。でも、何も教えてくれなかつた。私たち、親友だと思つてたのに……」

そういうと歩美は少し俯いた。

「でも、いいの。そのときはショックだつたけど、今考えれば、人つて誰にも話したくないことがあるんだって、わかるもの。だから、私の願いは一つ」

歩美は、コナンの顔を真っ直ぐに見た。

「お願い。昔の一人に戻つて。また、みんなで遊ぼうよ。ムリに仲直りしようと、言わない。でも、いまの姿の哀を見てるのは、とってもつらいの。だから、コナン君が許してんだったら」

その言葉を言つたときの歩美の眼は、とても澄んでいて綺麗だとコナンは思つた。

「歩美」

「ナンが低い声で歩美の名を呼ぶ。

「なに?」

いま歩美には、小さい頃の無邪氣とはなかつた。ただ純粋に、哀のことを心配してくる。

「正直いって、自分でもアイツのこと許してるのがどうか、わからねえんだ」

「え?」

思いがけないコナンの告白で、歩美は目を血黒させる。

「「の前、俺の母さん 有希子さん」会つた？ そんとお話し  
れたんだ」

「なんて？」

「『なんで自分の気持ちを認めないの？ 哀ちゃんはあなたに  
無視されても、酷い言葉かけられても、ずっとここまで我慢して耐  
えて、新ちゃんのこと想つてきたのに……』って」

歩美は有希子の言葉を噛みしめ、俯いた。

「……有希子さん……」

それから、しばし沈黙が続く。『気まくはないが、お互に次の言  
葉が続かない。一人してずっと空を見ていた。 青く澄んだ空。  
「ナンは」さつきの歩美の田を思い出した。

歩美は、黙りこくれた「ナン」を見て、声をかけた。

「 とつあえず戻る？ 「ナン君」

「いや、俺は「のままサボる。歩美だけ、行ってくれねーか？」

なんとなく、「ナンはサボるんだろうな、と歩美は思つていたの  
で、深く介入したりはしなかった。

「うん、わかった。 あ、「ナン君」

「うん？」

まだいい忘れていたことがあったのか、と思い、空を見上げていたコナンが歩美のほうを向く、と。

「私、コナン君のこと大好きだから…でも、コナン君が哀のこと好きなんだつたら、一人を応援するよ…！お幸せに！」

そういうて、屋上の入り口のドアをくぐって教室へ戻つていった。

「……強一な、歩美。おまえ、ホントいい女だよ」

彼女なら、自分よりもいい男を見つけられるだろ？。一人残されたコナンは、青く澄んだ空を見上げてそんなことを思った。

No.7 歩美の告白（後書き）

すみません！

急いでかいて、見直しどとかもあんまりしてないので、誤字脱字等あると思います。

見つけられたら「」報告を願いします。

一人教室に戻った歩美は、ドアの前で右往左往していた。

「……どうしよう、入つていいのかな？ 先生、絶対怒つてるよね……」

そんなこんなで五分間ずっとウロウロしていた。そして、最終的に「まあでも、あと五分で授業終わるし。トイレにでもこもつてればいいか」という判断になつた。ドアのところで待つていて、授業が終わつてから出てきた先生に見つかったらそれこそ厄介だ。

「あーもートイレつてどうだっけ？」

まだ学校に入学したばかりなので、いまいち校舎の構造がつかめない。しばらくさまよい、やつとトイレを見つけた。

「あー、よかつた。ここに隠れてよ」

歩美がトイレに入らうとした、そのとき。

がさつと、トイレの方から音がした。

( え、何？？)

未だにお化けや妖怪などを信じている歩美にとっては、とても恐

ろしかつた。

(「、怖い ）

咄嗟に逃げよつと思つたが、足が震えてその場から離れられない。

(ビ、ビヒヒヒ……）

もう一いつてこるうつか、その『お化け』が出てきた。

「キヤ～！～～！」

歩美が大音量で悲鳴を上げた。 すると。

「 歩美？」

落ち着いた声が上から降つてきた。

「……あれ。 哀？」

なんでここに、と聞こつとしだが、哀が歩美の口を手で塞いだため、声が出なかつた。

「静かに。 さつき、あなたが悲鳴をあげたから、誰か来るかもしない。 いま、授業中なんだから、見つかつたら相当怒られるわよ」  
哀が小声で囁く。

しばらくすると本当に誰かが来た。 よくは見えなかつたが、先生のようだ。

「おかしいわね……。さつき、悲鳴のようなものが聞こえた気がしたんだけど」

それは、クラス担任の優果の声だった。

歩美が「先生」と言つてトイレから出て行こうとする。それを哀が必死で押さえつけて阻止した。

「まったく、それにしても江戸川コナン、吉田歩美、そして灰原哀。あの三人、どこに行つたのかしら。灰原哀はトイレに行くといつたきり、帰つてこないし。吉田歩美も、初日にコナンを連れて授業前に出て行つてサボリとは、なかなかいい度胸してゐるじゃないの。ふふふ。一人ともたっぷり教育してあげないといけないようね」

歩美は、さつきとは別人の『先生』を見た。一時間目の自己紹介のときは全く違う、狂つた表情をしていた。

「 そして、江戸川コナン。彼を必ず私のものにしてやるわ」

不気味な笑いを残して、優果は去つていった。

優果が完全に行つたのを確認してから、哀と歩美は止めていた息を深く吐いた。

「はー。疲れた」

「『疲れた』じゃなによ、哀…。どうあるの…？　あの人、なんか不気味だつたよ…？」

なんか「ナン君の」とも言つたし…。といつ歩美の言葉を聞いて、はつとす。

「……歩美、江戸川君とは、なんの話をしてきたの？」

途端に歩美がびくつと震えた。

「えへ。そんな哀に聞かせるほどの大した話ではありますんで」

やうじつて、教室に戻りつつあると背を向けた歩美を、哀は腕を掴んで引き止めた。

「まさか……また余計な」とを言つたんじゃないでしょうか？」

「こり笑つてはいるが、怖い。歩美は、本能的にそつ察知した。哀が歩美の手を離す気配はまったくない。」このときの哀は全然ひかない。

歩美は早々に諦めた。

「えつと……。哀の」と、できれば許してあげて、つて」

「やつぱつ、余計な」と言つたのね……。まったく……江戸川君、何か言つてた？」

哀も、歩美が「ナンに哀との」とを聞いたところとは想定して

いたらしく、特別驚きもせずに次の言葉を促した。

「うん……私が『哀のこと、できれば許してあげて』つていつたら、  
「ナン君、『俺、自分でも灰原<sup>アイツ</sup>のこと許してるのがどうかわからな  
い』つて……」

「ナンのその言葉を聞いたときの哀の横顔は、悲しんでいるわけ  
でも喜んでいるわけでもなく、どこか昔を思い出すような、遠くを  
見て懐かしむような顔をしていた。

「……そつ……」

哀の言葉を最後に会話が途絶え、しばらく一人して黙つていると、  
授業終了のチャイムが学校に鳴り響いた。

「……もう授業終わつたから、戻つてもよさうね」

いきましょ、と哀に声をかけられ、歩美は彼女についていて  
教室に戻つた。哀は教室へ戻る途中、なんとなくという風に歩美に  
声をかけた。

「久住優果……氣をつけたほうがよさうね」

「うん、そだね……」

歩美も、哀と二人でトイレのところに隠れていたときに優果が言  
つていた台詞がずっと心に引っかかっていた。

『ふふふ。一人ともたつぱり教育してあげないといけないようね』

。

あの言葉が、歩美を恐怖に突き落とす。

『そして、江戸川コナン。彼を必ず私のものにしてやるわ』

この言葉を言つたときの優果の表情を思い出して、歩美は身震いした。

20.8 優果の恐怖（後書き）

またまた急いでかいたので、誤字脱字等あると思います。  
ご指摘よろしくお願ひします。

感想なども待つてますのでぜひぜひ書いてください

コナンたちが帝丹高校に入学してから一週間が経った。

相変わらず、コナンと哀は口を利いていない。そんな中、事件は起じた。

コナンは、今日もいつもと変わらず工藤邸のドアを開ける。すると、やはり同じタイミングで隣の阿笠邸から哀が出てきた。

「おせよ！」

「…………」

哀は挨拶をしたが、コナンはいつもどおり無言で歩いていった。

（私は、毒薬を作つて、それなのに今ものさきにのうと生きている女よ。なのに、なんで罵つてくれないの？）

いつそ、怒鳴つてくれればいいのに。怒鳴つて、罵つて、罵倒してくれれば貴方コナンに対するこの胸がはつきれそうな想いも、罪悪感も、全て忘れられるのに。

そんなことを考えているうち、コナンと哀はいつもの探偵団との集合場所についた。

「あー、哀、『ナン君…』おはよー。」

「おはよー、歩美」

「……はよ」

「ナンはいつも朝はテンションが低めだ。哀はここ数年でナンのことを理解してきた。

「元太はいつもの」とく時間にルーズで、まだきていない。

「あれ、珍しいね！ 二人一緒にきたの？」

「ええ、偶然家を出たら会つてね」

しばらぐ哀と歩美で話していると、元太がきた。

「わりいわりい、寝坊しちまつたぜ」

「もー、元太君遅い！」

今日も歩美の叱責から一日が始まり、学校へ向かう。いつもどおりの朝、のはず。

( なんか、静かすぎる気がする)

しばらぐして「ナンは異常に気がついた。

(いつもはアイツ、歩美と話してんの。なんで今日はこんなに静かなんだ？)

歩美と元太は、二人で話していく哀の異変に気づいていないようだ。

「おい灰原、なんかお前今日 」

「ナンは、『変だぜ』と続けようとしたが

「いえ、何でもないわ」

哀は、『ナンが全ていい終わる前に、相手の言つことを予測して返事を返した。

『ナンが哀に話しかけるのは、本当に久しぶりだった。相手が言おうとしたとしていることを理解し、全てを聞く前に質問を予想して答える、この感じ 。

懐かしい、と『ナンは思つた。こんな会話、哀としかできない。しかし、その相手の哀とは、長い間口を利いていなかつた。

だが、今は懐かしんでいる場合ではない。

「でも、やつぱり様子が 」

「だいじょ、」

「大丈夫じゃない」

『大丈夫』。昔から、哀がよく使う言葉。しかし、大丈夫といつても大抵は大丈夫ではないことが多いといふことを、『ナンは

よく知っている。そして、大丈夫といった彼女が、コナンの言つこと全く聞かないといつことも。

「……具合悪そうにしてたら、すぐに家に追い返すから

今のコナンには、それくらいしか言えなかつた。

・  
・  
・

一時間目・理科、二時間目・数学、三時間目・道徳、四時間目・国語。給食、昼休み とコナンはずつと哀の様子を見てきたが、明らかに具合が悪そうである。だが哀が必死で気分が悪いことを隠そうとしているためか、周りの人は誰一人として彼女の様子がおかしいことに気づかない。

そして、五時間目・体育。これが問題の授業となつた。

体育は、身長順で整列する。このクラスは男女比が大体同じくらいなため、女子のなかで背が高いほうの哀と、男子のなかで背の高いほうのコナンは並ぶとちょうど隣になる。

「おい灰原、いい加減にしろよ」

「……な、にが」

「『なにが』じゃねーよー そんなひ弱そうな声出しあがつて。今先生のところに突き出してやるからな」

「ナンは、眞合の悪わづな哀にそう断言した。

「……ダメよ」

「あ？」

「私は、あなたの体の状況を見ていないといけないの。私たちの体の中には、まだAPT-X 4869の毒が残つてゐる。いつ私たちが倒れてもおかしくないわ……。あなた、私がいないときに倒れて病院送りになつたら、どうするつもり？ 病院に行つても、手当てのしようがないわ。下手をすれば死んでしまうかもしない……。私がつくつた毒よ。私がそばにいるのが一番安全なの。氣休めになる薬を作つてあげられる。だから……」

哀の言つてゐることは、おそらく本当なのだひつ。ナンと哀は解毒剤を飲んでいないので、確かにいつ何時倒れてもおかしくない。

だが、おそらく哀は「倒れたときに診てあげるため」という理由だけではなく、「彼を死なせたらいけない。あの薬をつくつたのは私なんだから……」といつ罪悪感からもあり、学校に残るといつているのだろう。

その気持ちを理解できない「ナンではない。

「……今日は見逃してやるけど、次ふらついたら家に連れて帰るからな」

「ナンはとりあえず、今は哀にそひ伝えた。



N o . 9 罪悪感（後書き）

やつと灰原さんと江戸川君、口利けました〜〜〜！  
二人が話せてよかったです

じゅんじゅん会話していく（予定です）ので、これからもどうぞよろしくお願いします。

「おい、そこ！ 江戸川と灰原！ うるさいぞ、私語は慎め！」

「すみません」

哀としゃべっていたコナンは体育教師に怒られ、一人して謝った。

「よし、じゃあ今日はバスケをする！ ルールを知らないやつはない」と思うが、一応説明しておこう。まず、バスケというのは

熱血系の体育の男性教師がバスケについて語りだしたところで、コナンは哀を見た。

普段どおりの、どこか冷めた、けれども顔のパーソンが整っていて綺麗な顔。

（ 無理して、倒れなきやいいけど）

しばらくして教師のバスケについて（なんかたまにその教師の人生経験談が入つて長くなつた）の話が終わり、試合形式のゲームが始まつた。

男女強さが偏らないように、同じくらいの強さの人と一人組みをつくり、グットッパ（グーカパーを出して一組に分けるもの）をし

て、チーム分けをした。コナンと哀は一人ともグーを出し（手の形をグーから変えるのがめんどくさかつたから）、同じチームになった。

試合開始三分、コナンがバスされたボールをキャッチして、そのまま鮮やかにショートをきめた。

「やや～！」

「コナン君かっこいい！」

これで勢いづいたコナンたちのチームは、さらに八点追加した。

「おお～」

歓声があちこちであがる。

だが、コナンはずつと哀の様子を見ていた。明らかに彼女の動きがおかしい。もともと哀は運動がそこまで苦手でもない（ズバぬけてできるというわけでもないが）ので、いつもは少しはボールに触つたりするのだが、今日はまだ一回も触れていない。それに、少しふらつとしているような気もある。

「コナンが不審に思っていた、そのときだった。

「危ない！..」

誰かが、叫んだ。哀のほうにバスケのボールが一直線に飛んでくる。ぼーっとしていいる哀は気づいていない。

「灰原、避ける！」

「え？」

「コナンは哀のほうに全速力で走った。ボールが哀の顔面に当たる前に、パシッとつかみ、そのまま味方にパスする。

その行動の鮮やかさに、ほとんどの女子がコナンに見惚れた。それと同時に、助けられた灰原に羨ましそうな視線を向ける。

だがコナンは、いまの哀の反応の遅さでわかつてしまつた。哀は、いまはもう運動や冷静な判断ができる様子ではない。

(灰原 タイムリミットだぜ)

「コナンが哀のところにかけよる」と同時に、彼女の膝が力を失い、コナンのほうに倒れこんできた。咄嗟にコナンは哀の肩を支える。

「おい、ちょっと灰原」

「工藤君」

「わりいけど、約束どおり連れ帰らせてもらひつから」

「わかったわ

哀はもう抵抗しなかつた。否、抵抗する気力すら残つていなかつた。

「俺、先生のところ行つて、灰原の具合が悪いって言つてくるから。  
一人で立てるか？」

「ええ」

哀がそう返事をすると、コナンはそつと哀の肩を離した。

「じゃ、ちょっとそこいら辺に座つて待つてろ」

「コナンが先生のところにかけよつていくのを、哀はうすれゆく意識のなかで感じた。

しばらく待つていると、コナンが哀のほうへ戻ってきた。

「灰原、大丈夫か？ どつか辛いとか、ないか？」

「大丈夫……」

ああ、どうしてコナンはこんなに優しいの？ 私は、この世に存在する価値のない人間なのに。

この人と、出会いたくなかった。会わなければ、こんな想いを知ることなんてなかつたのに。

「え？」

哀としては、口に出しているつもりはなかつたのだが、コナンが何か聞き返したところをみると、口に出してしゃべっていたらしい。だが、小声だったのか、よく聞こえていなかつたようだ。

「 私、あなたなんかに、会いたくなかった……」

それを最後に、哀の意識はぱつつりと途切れた。

・  
・  
・

『 そんなこと言つんじゃねーよ』

どこからか、いま私が一番声を聞きたくない人の声が聞こえた。

『 僕は、 僕は、おめえに出来てよかつたって、そう思つてる。  
おめえに会えなかつたら、僕、きっと昔のままだつた。 世の中  
に、辛い人がいっぱいいるつてこと、なにも知らないですごしてた  
と思う。 A P T Xで小さくされたからつて、自分が一番辛い思いを  
していると勝手に思いこんでた。 僕より辛い思いしてるやつなんて、  
大勢いるのに。 僕にそのことを気づかてくれたのは、お前な  
んだよ、灰原。だから 』

だからあなたは嫌いなのよ。その口、綺麗なことしか言わな  
いでしよう?

『 だから、泣くな』

泣くな? 誰が泣いてるつて?

『冗談はいい加減にして。私が泣くわけないでしょ。泣く価値も  
ない人間なのよ、私は。泣くことなんて、許されない。私の作った  
薬のせいで、どれだけの人が辛く、悲しい目にあつたか……。』

あなたも、その中の一人。私のせいで、人生が狂ってしまった人。

私さえいなければ、いまじいろ愛しの彼女と一緒に。

『灰原。俺、お前のことが』

江戸川君が私に何かを伝えようとした瞬間、私は彼の声を振り切るようになりを開けた。

・  
・  
・

哀が目を開けると、見慣れない天井があつた。

「…………」

「お、気づいたか？」

声が聞こえてその方向を向くと、見知った顔があつた。

「江戸川、君？」

「ああ。俺、保健委員だから」

声は普通だが、なぜかコナンの顔が赤い。しかし哀はそのことにについては言及しなかつた。

「…………」

哀は自分が倒れる前のことを思い出そうとしたが、記憶が微妙なところで途切れていってさっぱり思い出せない。

「ねえ、私どうなったの？」

哀が聞くと、コナンは少しムツとした表情になつた。

「お前、体育の時間に倒れたんだぜ。つたぐ、だから無理すんなって言つたのに。それで、保健委員の俺がお前を保健室まで運んできた。あ、ちなみにいつも保健室にいるあのクソババアは今日出張でいなーんだとさ。で、俺がいままでお前を看病してたつてわけ」

「そう

哀は大体思い出した。

「じゃ、帰るか。もう六時だし。部活やつてるやつ以外、みんな帰つちまつたぜ」

「あら、もうそんな時間なの？ じゃあ早く帰りましょ。博士がお腹空かしてるわ」

コナンは内心、「やつぱぱイシは博士が一番なのか」と思つて、ちよつと悲しい気持ちになつた。絶対「俺と博士どっちが好き？」と聞けば、彼女は「博士」と即答するだろう。

コナンがちよつと落ち込んでこると、やつこえは、とある口元で「あんがちよつと落ち込んでこると、やつこえは」とある口元で氣づいた。

「やつこえば俺鞄教室だー。やべや

「あ、私も教室だわ

「え、まじですか。じゃ、おめーのもとへくるから私が待って  
る。」

そういうと、コナンは勢いよく保健室から出て行って、一階の一  
年教室まで鞄をとりにいった。

## No.10 会いたくなかった（後書き）

Rukaです！

最近テスト勉強してて、なかなか投稿できずにすみませんでした。

もう夏休みに入ったんで、これからはどんどん投稿していきます  
！！

と、言いたいところですが、今度は夏休みの課題におわれる  
ことになります。

理科の宿題が多い～！！

「ねえ、コナン君。昨日、哀となじしゃべつたの？」

十分休み、コナンの席に来た歩美は、いきなり彼にその話題を持ちだした。

「え？」

コナンは、急にその話を持ちかけてきた年下の少女を見た。

「だからー。昨日哀とコナン君、体育の授業のときしゃべつてたでしょ？ あのとき、なに話してたの？」

「ああ、そのときなり」

コナンはほつとした。今日、哀は昨日具合が悪かったため、欠席である。

「灰原の顔色が悪そうだったから、無理すんなって言つただけだよ」

「ふーん。じゃあさ、『そのときなり』つてことは、別のときにもだなにか一人でしゃべつたの？」

「コナンはかなづきくつとした。

歩美は最近、いわゆる『乙女の勘』とこいつものが発達してきている。

「あ、そういうえばコナン君ついで、昨日哀を博士の家まで送つてあげたんでしょ？ でも昨日つて、博士学会に行つてていなつて、哀が言つてたよつな……」

「コナンはだらだらと冷や汗を流した。 ヤバイ。

「もしかしてコナン君、博士いなくて哀と一緒につだからつて、昨日哀になんかしてないよね？」

かちーん、とコナンは固まつた。

「…………し、してねえよ。ていうか、俺らそんな関係じゃねーつて……！」

「うーん、それもそつか

咄嗟に出た言葉で、かなり苦しいと自分でも思つたが、素直な歩美はそれを信じたらしく、あつさりその話題は終わつた。

「あ、ねえねえコナン君知つてる？ そういうばさ

「…………え？」

次の瞬間、歩美の口から発された言葉に、コナンは驚愕した。

「悪いな、灰原。お前真面目いのに、事件に付き合つてもひつちまつて」

昨日の帰り道、哀に肩をかしていったコナンは、阿笠邸の門の前まで来るときもいつつた。

「いいえ。こんなこと、これまであなたが私にかけた迷惑の数々に比べれば、なんてことないわ」

「……スマセン」

コナンは、ベルモットのところまで哀に変装して乗り込んだり、水無怜奈の靴の底にガムに包まつた盗聴器をつけたりするなど、覚えがありすぎるほどあつたので、謝つた。

「わかればいいのよ」

「……ハイ」

「ナンはいつになつても哀に敵わないのだった。

「まあ、いこわよ。わざと保健室で寝させてもらひたから、随分気分も楽になつたし。それと、送つてくれてびつもありがとう」

哀にしては珍しく、素直にお礼を言つた。

「じゃ、私はこれで……」

もう一つ別れようとした哀を、コナンが引き止めた。

「あ、俺看病するぜ?」

「え? なんで?」

ひきり自分を家まで送つたら帰ると想つていた哀は、びっくりしてコナンの顔を見た。

「なんでつて……。だって今日、お前んとこ博士いないんだろ? 歩美から聞いたぜ」

「ええ、せうだけど……でも」

「大丈夫だつて。襲わねーし」

「誰もあなたが私を襲つほど度胸があるなんて思つてないわよ。へタレな名探偵さん?」

哀がやつこつと、コナンはまくつと俯いて悔しそうな(?)顔をした。

「そりね……でもまあ、博士いなーから看病してもいいからしちゃ」

「え? まじで?」

「 そのかわり、しっかり働く」とね

そういう残すと、彼女は一人でちと家中へ入つていつてしまつた。

「ナンは、哀の人使いの荒さを思い出し、少し顔をしかめたが、哀の後を追つて阿笠邸に入つていつた。

「あ、そういえばよ」

哀が阿笠邸のリビングに入ると、玄関で靴を脱いでいたコナンが声をかけてきた。

「何？」

「おめえ、さつき俺が言つたこと聞こえてただろ？」

哀はコナンの会話の意図が全く読めず、訝しげに首をかしげた。

「?? なんのこと?」

「……もしかして、本当に寝てた?」

「ナンも哀の後を追つて、阿笠邸のリビングに入つてぐる。

そして、哀にビニからか持つてきただ体温計を手渡した。ビニから「測れ」といひつらつていつた。

「?? こつ?」

「六時頃、保健室で」

「ああ、寝てたわよ

哀が肯定しつつ体温計を脇に挟むと、コナンはなぜかがくつと落ち込み、頭を抱えてリビングのソファに座り込んだ。

「まじかよーーー！ お前、ちょうど間にタイミングで起きるから、狸寝入りしてるとと思つて超焦つたのにーーー！」

哀に聞こえていないとわかつて、（多少落ち込んだが）冷静を取り戻したコナンは、すくつと立ち上がり、勝手に博士のタンスの上から三段目を開けた。おそらく、冷却ジェルシートでも探しているのだろう。

「何て言つたの？」

「俺、お前に出来たよかつたって、言つたんだがぞ」

このタイミングで、哀が脇に挟んでいた体温計が「ピーピー」と機械的な音を鳴らし、計測結果が出たことを伝える。

哀が測定値を見てみると、三十七度三分だった。さつき家に戻つてくる前に保健室で測つたときは三十七度六分だったから、まあちょっと下がつたところになる。

「あの声、本当にあなたの声だったの？」

冷却ジェルシートを探してタンスをじろじろあさつていたコナンの手が、哀の言葉に反応してぴたつと止まつた。

「え？」

「寝ている間、夢を見たのよ。あなたが、 私に、なにか言おうとしたわ」

哀がセリフをつと、コナンは顔を赤くした。

「 あれは、夢じゃなかつたのね……。じゃあもしかして、私の夢に出てきた方ではないあなたも、あの時私になにか言おうとしたのかしら? 」

「 そ、それは……」

哀は、口もつてせりふ顔を真つ赤にし、俯くコナンを急かした。

「 なによ。男だつたらせりふ言ことなさー」

コナンは哀の言葉を聞き、俯いていた顔を勢いよく上げた。

「 僕、お前が好きなんだ!!」

「 ……は?」

「 だから、僕はお前が好きなんだよ。灰原」

突然のコナンの告白に、哀は困惑する。

「 あなた、何を言つてるの? だつて、彼女が 」

「 蘭は、もう工藤新一のことになんて待つてねえし、必要ともしてねえよ。俺がいなくとも、生きていくてる。それに、アイツいまは、

本堂瑛祐と付き合つてゐるんだ」

「いまから三年前の冬、つまり蘭たちが一十三歳のとき、本堂瑛祐はアメリカから日本に一時帰国した。その際、毛利探偵事務所に立ち寄つて、蘭に自分の想いを告げたらしい。

蘭はそのとき、新一が死亡したということを工藤夫妻から伝えられたばかりでショックが大きかつたため、「いまはそういう気になれない」といつて断つたそうだ。

だが、それから一年後、また瑛祐が蘭に「僕はヨボヨボのご老体になつても、いつまでも蘭さんのことを想い続けます！」と熱烈アプローチをした。蘭は、「コナンから『江戸川コナン』＝工藤新一」という真実を教えてもらい、新一への想いを吹つ切れたため、現在は結婚を前提に付き合つてゐるらしい。

「蘭、<sup>アイツ</sup>幸せそうだったよ。楽しそうだった。本堂なら、蘭を泣かせるようなことはしないだろ」

「そんな……」

「コナンの口から告げられた真実に、哀は目を丸くする。

コナンはタンスからめあての品（＝冷却ジェルシート）を見つけたようで、「あつたあつた」と言いながら哀のほうに近付いてきた。

「『ごめんなさい』。私のつくりてしまつた薬のせいで、<sup>あなたたち</sup>蘭と新一を引き離してしまつて……」

哀は、田に涙をいっぱいにためて、コナンに謝った。

「コナンは『氣にすんな』とでも呟つみつて、哀の頭を軽くなで、おでこに冷却ジェルシートを貼ると、彼女をそつと抱き寄せた。

哀は、それでも何度も何度も「『めんなさい』と、謝罪の言葉を口にする。彼女の目からついに溜まっていた涙が落ちた。

コナンは、そんな哀に優しく口付けた。

哀がコナンにキスされたと気づいたのは、すでにコナンの顔が離れていた後だつた。

哀が呆然としていると、コナンは顔を下に向けて悪<sup>レフ</sup>イ、と謝った。そして、そのまま哀と田を合わせることなく彼女を寝室のベッドまで連れて行き、そのまま布団をかけて寝かせた。

「俺、本気だから」

そういうと、コナンは阿笠翁を出て行った。

みなせんべーやんこちば

」の話を読んで、「あれ、なんかいつもより長くね?」と思われた方……。もしいらつしゃいましたら、その方は観察眼が鋭いですな。

今回の話題は、いつもよじも1・5倍伸びくなつておつまよ。

普段は本文大体2000文字くらいにしているつもりなのですが、なにしろサブタイトルが「進展」なものですから……。タイトルどおり、二人の間を進展させようと奮闘したところ、このよつな長さに……。

むつ少し（100～200文字くらい）？）短くしそうと思えばで  
きたかもしれないですが、一回「まあいつか」と思ってしまつてか  
ら、思考がだんだん進まなくなつてしまつました……。

あはは

「ここをカットするか考えるのに頭がついていかなくなってしまった、カットしようつと思つて見直ししてゐるのに、「あ、ここ付け足さなきや意味わかんないよ」というところがたくさん見つかって、付け足していくと長くなってしまつたんです！」

なんか、話だけでなくあとがきも長くなつたような……？  
まあ、その辺は大目に見てやってください。

ちなみに、コナン君は毛利探偵事務所を出て、工藤氏の家に住んでいる設定です。

次回もよろしくお願いします。

「君……コ、ナ……コナン君……」

「え?」

「昨日のでき」と走馬灯のように思に出していたコナンは、歩美の声でスッと現実に引き戻された。

「大丈夫? 顔色悪いみたいだけ? .....。まさか、昨日ずっと保健室で哀の看病してたから、風邪がうつったんじゃ? .....」

「いや、うつってねえって。大丈夫」

「ホント? ならよかつた」

歩美は明らかにほつとした様子だ。

「やつしょれば、哀じうしてるのかなあ? .....」

歩美が、遠くの空に浮かんでいる大きな白い入道雲を眺めながらいった。

「さあな……寝てんじゃねえ?」

「コナン君、今日哀のところお見舞いに行く?」

実のところ、コナンは、昨日のでき」とがあつて気まずいので、できるだけ哀とは顔を合わせたくなかつたが、彼女の様子が今日一寸ずつと気になつていて、ようがなかつた。確か、博士は今日の夕方じろに帰つてくると言つていて、哀はいま一人で家にいると、いつことになる。

「そうだな……。今日は、教師たちで集まる市の職員会議があつて、短縮四限授業で部活なし・給食なしらしいし、博士もいなくて灰原<sup>アイツ</sup>大変だらうから、行つてみるか?」

「コナンが哀のところに見舞いに行く、といつだけで、歩美はどうはねて喜んだ。

「ホント? よかつた。歩美たち、ほんとみんな嬉しかつたんだよ!」

そういいながら、歩美は「ね!」といつの間にか後にいた元太を振り返る。

「おう! 俺、昨日光彦にメールして教えたからな!」

「なにを?」

「コナンが不思議そうな顔をして聞く。

「コナン君と哀が久しづびにしゃべつたつてことだよ!」

歩美が、コナンのほうを見て、にっこり笑つて嬉しそうな顔をする。

「あ、それじゃあ、今度の日曜みんなでコナン邸の家に行つて、『  
哀とコナン邸の仲直り記念パーティー』しよう。」

「お、いいなー、あ、光彦も呼んで久しぶりに探偵団で遊ぼうかー。」

「うじょう、とこつて勝手にパーティー開催場所にされた家主（  
＝コナン）に了承もとらずに話が進んでいった。」

（ 面倒だわ…… ）

哀は、阿笠邸の地下の研究室の冷たい床に座つていた。近くにベ  
ッドも椅子もあつたが、なぜか哀は今は床に座りたい気分だつた。

冷たい床に座ると、ぼつりとしていた頭がだんだんすつきりして  
きた。

熱のせいでもつとじていたのではなく、昨日コナンが言つたあ  
の言葉のせいで、今日一日中頭が混乱していた。

正直にいえば、今日、哀は別に風邪で学校を休んだわけではない。  
たしかにまだ熱は多少あり、頭もがんがんして痛いような気がする  
が、我慢できないほどではない。しかも今日は体育や技術などの移  
動教室の授業はなく、短縮四限だったので、学校に行つてもたいし  
て支障はでない。しかし、まだ返事を返せない状況でコナンに会つ  
のは気まずいと哀は判断し、学校に行かないことにした。

(お姉ちゃん……私がどうしたらいいの？ 私……まだ、彼のことが

もちろん、哀は今でもコナンのことが好きだ。その想いは隠すつもりもないし、消そうとも思わない。昔、コナンのことを忘れようと努力したこと也有ったけれど、結局忘れられなかつたため、今はもう想いを消すことは諦めている。

(蘭さんは、私の正体を知つていいのかしら……？)

数年前、博士から「コナン君が、蘭君に自分の正体を言つたらしい」ということは聞いた。「自分の正体を言つた」ということは、「江戸川コナン＝工藤新一」ということを伝えたのは確かだ。だが、コナンが「灰原哀＝宮野志保」ということを伝えたのがどうかは、哀は知らない。

蘭が「灰原哀＝宮野志保」という事実を知つてているのだとしたら、なおさら自分はコナンの告白を受けるわけにはいかないだろう。コナンが蘭に「灰原哀＝宮野志保」ということを話した、となると、彼女は「宮野志保（＝灰原哀）は、<sup>蘭</sup>と新一の仲を引き裂いた張本人のくせに、あらうことか今新一と付き合つて普通の人のように生きていく。罪人のくせに」と思つだらう。

また、蘭が「灰原哀＝宮野志保」という事実を知らなくて、哀は「自分が幸せになつてはいけない」と強く自己暗示をかけているため、コナンの告白は受けないつもりでいる。

(……そつよ、昨日のことは忘れましょ。コナンのためにも、<sup>かのじょ</sup>蘭

のためにも、自分のためにも。この選択が、みんなが幸せになる最善の道だもの……）

昔読んだ、なにかの本に書いてあった。

他人を幸せにするためには、自分が大変な苦労しなければいけないこともある、と。

その本の主人公の少女は、自分の幸福を失つてまで好きな男のために自分の人生を全てささげ、道を切り開き、駆け抜けた。そして、自分のやることを成し遂げたあと、死んでしまった。

その本を読んだとき、「自分も、きっとそういう運命なのだろう」と哀は思った。蘭とコナンを幸せにするために、自分の気持ちを封じなければならない。それが、自分の運命。

「運命は変えられる」とよく言つけれど、そんな簡単なことではない。確かに、変えようと思えば変えられるのだろうが、天の定めたものに逆らうと、人は罰を受ける。あとで、その代償をはらわなければならぬ。

その「代償」が、自分ひとりですめばいいのだが、物事、そういうまくはいかない。自分以外の誰かにも災難がふりかかるようになっている。

自分と全く関わりのない人や動物、自然が被害を受ける。哀にとつては、それがたえられなかつた。

哀がそんなことを考えていると、阿笠邸のインターホンが鳴った。

( 誰かしら。宅配便とか? )

そう思つて哀が扉を開けると。

「よひ。元気だつたか?」

いま、一番会いたくなかった人が、玄関に立つていた。

N o . 12 決意（後書き）

じんにむかひ。

毎日暑いですねー。

私の住んでる地域は、（ここへりにだけ？）雨が続いて、川がやばかひたです。

水の色が茶色くにじり、水位はこつもの1倍以上に……。

あんまつ台風とか来ない地域なので、経験したことのなこぼりの強い雨に驚きました。

次回もまいりしへです。

哀は、玄関に立っているコナンの存在に驚いた。

「……工藤君……。なんぞ、こいつは？」

「いや、今日は短縮授業で早く帰つてこれたし、家も隣だし、博士まだいないみたいだし、ちょっと様子でも見てこつかな～って思つて……」

「 そう」

コナンがきたせいで、哀が今日学校に行かなかつた意味がなくなつてしまつた。

( ちやんと、歎白、断らなこと)

哀は、さつき決めた決意を搖らがせないため、もつ一度心に鍵をかけなおす。

「 とつあえず、あがつて」

「 ……おひ、おこせむ」

コレングに通されたコナンは、とつあえず哀に当たり障りのない話の話題をふつた。

「元気やつで、安心したよ」

「ええ」

もつけない返答。会話が途切れる。

「……博士、夕方まで帰つてこないんだつてな」

「ええ」

「……真合ひだ？ 大分よくなつたか？」

「ええ」

哀の返答がいつも同じだ。コナンは少々ムツとした。

「……お前、『ええ』以外になんかいえねえのか？」

「……だつてあなたが、私が『ええ』つて答えるしかない質問をしてくるんだもの」

やつこえはやうだつたかもしれない、とコナンは語つた。

「……悪い<sup>わり</sup>」

「わかれればいいのよ」

哀がふつと不敵に微笑む。

「なんか、前もこんな会話しなかつたつけ??」

「……やつこえさせ、したわね」

「ナンが記憶を探り当てる。

「たしか、昨日俺たちが学校から帰つて、阿笠邸に着いたとき  
だつたよな? ?」

「やうだつたわね……」

不意に、哀は懐かしい気持ちに襲われた。あの会話のあと、ナン  
に告白されたのだ。

「あのあと俺がした告白の返事、出た? ?」

「ええ。考え方せてもらつたわ」

哀は口を開じた。そして、深く深呼吸をする。

「私、あなたの気持ちに答えることはできない」

言えた。この気持ちを伝えるのと、哀は向ひついで一年分の勇気  
をかき集めた。

「……嘘ばつか」

「え?」

「ナンが発した言葉に、哀は驚いた。

「…………」

「…………」  
ナナハンが、哀の頬に触れる。そこには、涙が流れている。

「あ

綺麗な嘘がつけてくる、眞信があつたの。これでは、せつかくの覚悟が台無しだ。

「つたく、バレバレなんだよ」

「…………」

哀はつむいた。

（ ナナハン。綺麗に嘘をついて、「いぬんなさー」とつて、終わるはずだったの（元）

「 で？ お前の本当の気持ちは？」

ナナハンが、哀を見つめてくれる。この真っ直ぐな眼に、哀は弱い。

「私、は……」

哀は、そのまま黙り込んでしまつた。

・

・

・

歩美は、「ナンが哀のところへ向かうため猛スピードで教室を出て行つたあと、元太と一人でのんびり帰つていた。

「コナン君と哀、うまくいったかなあ」

「ああ? どうだりうな」

元太が歩美からコナンと哀についての相談を受けるよつになつてから、けつこうな月日が経つ。

「哀ちゃんつて、絶対コナン君のこと好きだと思つうの……」

まだ、歩美が哀のことをけやん付けで呼んでいた頃。元太は、哀がコナンのことを想つているなんてことは微塵も感じ取つていなかつたため、当時小学校中学生だつた歩美からそのことを告白されたときは、正直「コイツ、観察力ねえな……」と思つた。

だが、実際観察力がなかつたのは自分のほうだつた。

歩美のその言葉を聞いてから、たまにコナンと哀の様子を見てみると、哀がコナンのほうをじっと見つめていることがたびたびあつた。それに、コナンが他の女子としゃべつているとき、哀がひどく哀しそうな顔をしているのを田撃したこともあつた。

元太が、そのことを歩美に言つと「やつぱつね!」といつ反応が返つてきた。

「元太君、コナン君と哀のことをつけるの、手伝つて!」

歩美にそう言われたときは、正直あまり賛成できなかつた。

元太は、歩美が無理してコナンと哀を結び付けようとしているのではないかと思った。歩美の笑顔が、いつもと違つた。いつも歩美のことを見つめている自分が言つのだから、間違いない。

「お前、自分の気持ちはいいのかよ！？」

歩美は、小学一年生のときから、ずっとコナンのことを想つている。その気持ちは、生半可なものじゃないはず。そう思い、元太は歩美に思わず聞いてしまつた。

そう叫んだ後、元太ははつとした。歩美が、すじぐ困つた顔をしていた。

「元太君、気づいてたんだね……」

歩美は元太に向かつて、軽く微笑んだ。

「いいの。もう、コナン君のことはふつ切る。私は、自分で新しい恋を見つけるから」

そう言つたときの歩美の顔があまりにも神秘的で、元太は今までもその顔が強く印象に残つている。

「……哀、素直になれるかな……」

歩美がポツリと呟く。

「 大丈夫だつて。お前の親友なんだる? 」

元太がそうこうと、歩美は笑つて「 そうだね 」と頷いた。

・ · · ·

「 私も、好き 」

しばらぐの沈黙のち、哀はその六文字の言葉を発した。  
すると、田の前にある「 ナン 」の顔がまるまる紅く染まつていく。

「 灰原 」

嬉しい、といながら、「 ナン 」は哀に抱きつくる。

「 ちよ、ちよつと…… 」

いつも口では皮肉ばかり言ひる哀も、今回は顔をみると嬉しそうだ。

「 僕、今世界で一番幸せかも 」

「 あなたは一番田よ 」

哀のその言葉に、「 ナンは「 え? 」 と首を傾げる。

「 私が、今世界で一番幸せよ 」

「哀」「

「ナンが、哀の名前を呼ぶ。その声に、哀はコナンを真っ直ぐ見つめた。

「なに?」

「改めて、俺と付き合つてください」

彼は、どうでも真っ直ぐだ、と哀は思つた。そんなコナンの姿に、哀はこりこりと微笑んだ。

「よひ」と。これからもよろしくね、江戸川君

やつして一人で笑い合つた。

「素直に気持ちを伝えてくれて、ありがとな」

「……どういう意味?」

一人で笑い合つた後、コナンが発した言葉に哀が聞き返すと、コナンは不敵に笑つた。「ふふん」と鼻で笑われた気がする。

「俺、気づいてたよ、お前の気持ち。お前が俺のこと好きってことも、蘭や歩美のことがどうしても気になつて、俺の告白を素直に受けよつとしないつてこともわかつてた」

哀は昔から、コナンは恋愛方面に疎いと思つていた。だが、哀の

『気持ちちは『ナシに読み取られていたらしい。

「 知つてたの……」

「ああ……。 でも、なんで俺に素直に気持ちを伝える気になつたんだ？」

「ああ、それは 」

『哀は昨日の夜の『哀』』とを語り始めた。

『昨日、歩美に言われたからよ 』『哀、素直になつて』つて

No.13　返事（後書き）

Rukaです。

灰原サンと江戸川サン、ようやく付き合えましたね  
よかったです

次回もよろしくお願いします。

前半、灰原さん視点です。

ふとリビングの時計を見ると、すでに一十一時をまわっていた。いつの間に時間がこんなに経っていたのだろう。無心とは怖いものだ。

私は、もう遅い時刻になつたのでお風呂に入らうと思いつつ、読みかけの雑誌を閉じて風呂場に行こうとした。

そのとき、阿笠邸の電話が鳴つた。

こんな時間に……誰かしら、と思いながら私は受話器をとつた。

「もしもし……」

いつもどおりの声で電話に出る。よく女性が電話に出るときに使う、あの高い声はどうも苦手だ。あの声は、自分は出せないし、人があの声を出しているのを聞くのも億劫だ。

『あ、もしもし歩美だけど……。えつと……、もしかして哀??』

「ええ、やつだけど」

風呂場に行こうとしてたときになつて電話が鳴つたので、私は若干不機嫌だったが、あゆみ親友からの電話とこいつことで、少しイライラ

が収まつた。

『「つわー、哀つて、やつぱり声大人っぽいねー、歩美もそんな風に電話に出られたらいいなー』

「…………やつへ。」

『「うそ、やつー、ヒーリー、今なにした?..』

なぜイキナリ話がやつにこくのか。私は不思議に思つたが、正直に答えた。

『……別に、雑誌読んでもお風呂に入らつとしただけだけ?..』

『えー!?. ダメだよ、哀! 風邪を引いてるときも、お風呂に入っちゃいけないの!』

歩美がふんふんと怒り出す。

「え……やつ、なの?」

私は組織で暮らしていたため、やつこつ類のことはあまり知らなかつた。

私が「でもそんなに酷い風邪じゃないし……」といつ前に、電話越しで歩美に「今日はお風呂ダメだからねー」と釘を刺されたので、彼女の言つたことに従つてひつじした。

『「じゆでや、ロナン君、今日哀に告白したでしょ?』

こもなり歩美の口から出た言葉に、私は驚愕した。

「…… なんでそれを？ 江戸川君が言つてたの！？」

『「うん。私の勘。そつか、やつぱり告白したんだ』

歩美のその言葉の裏に、どこか寂しげなものが感じられて、私は少し慌てた。

「あ、でも私は、江戸川君の告白受けるつもりはないから、安心して……！」

『 哀！ ロナン君の気持ちをそんな風にして扱わないで！ 大切にして！ 私は、ロナン君も哀も大好きだから、一人が両思いなんだつたら応援するよ！』

電話越しでも、歩美が涙声なのが伝わってきた。

電話の向こう側で、歩美が泣いている。それは、私が江戸川君の告白を断ると言つたからか。それとも、江戸川君が私に告白して、失恋したと思ったからか。

どちらにしろ、私と江戸川君が歩美に辛い思いをさせてくるといつことは確かだ。

「…………」

私が沈黙を貫いていると、歩美が明るい声で言つた。

『 素直になつてよ、哀！ ロナン君も私も、哀が素直になるの

を望んでるんだからー。』

歩美が無理をして『いる』ところは、すぐにわかった。でも、自分よりも小さい女の子に慰められて『いる』と思うと、私はなんだか不思議な気がして、おかしくて笑ってしまった。

「……わかったわ」

私が少し笑いを含ませた声で言つと、歩美も少し笑つた。

・

「歩美、か……。哀、お前いい友だち持つたな」

哀から『昨夜のでき』とを聞いたコナンは、哀が話をしている間に、どこからか『張り出』してきたであらわし冷却ジエルシートを渡した。

「わづね……。私、歩美に昨日あの言葉を言つてもらつてなかつたら、戸戸川君の告白、受けずにはいたと思つ……」

冷却ジエルシートをコナンから受け取つた哀は、それを自分の額に貼りつとする。しかし、額というのは自分からは見えないとこりにある。哀の近くに鏡はなく、額の様子が見えない。哀がかなり四苦八苦している。

「つたぐ、しょうがねえなあ」

哀の様子を見かねたコナンが、彼女の近くに歩み寄つてきた。

「 え？」

「ナランは、哀の額に冷却ジェルシートを貼つた。哀は、ナランの突然の行為に驚く。そして、ナランと血分とのあまりの顔の近さに、哀の顔が赤くなる。

「ナランがそんな哀の様子を見て「ここにつけつけつかわいい」とあるんだな……」と思つたのは、彼女には絶対に言えない。

「 正直ね、わざわまで 本当にこれわざわまで、あなたの告白断つひつてたの」

「ナランとの顔の距離の近さを紛らわすためか、哀が急にそんなことを言つた。

「え？」

「あなたが来る前も、絶対に告白は断つひつてた心に決めてた」

軽く微笑みながら語る哀だが、その瞳からは本当にわざわじまで断つひつとしていたことが伺えた。

「でも、歩美の声が、頭の中で聞こえてね。そしたら『私、嘘つこひやこひないんだ。素直にならなきや』って思つたの」

「哀……」

「ナランは哀の名を呟きながら、彼女の手に血分の手を重ねる。

「ほんと、素直になつてくれてサンキューな」

「ナンは、そのまま娘を自分のほうへぐつと引き寄せ、顔をふれこだ。

Rukaです。

歩美ちゃん……いい子ですな  
やつぱり口哀にするには彼女の活躍＆協力が必要不可欠ですね！

冷却ジエルシートって、貼りにくいですよね。  
私、あれ貼るの苦手なんですね……。

次回もよろしくお願いします。

朝、コナンが工藤邸を出ると、さすがに喪も阿笠邸から出でてくるところだった。

いつもの光景。

「あら、江戸川君。おはよ！」

「……はよ」

最近、示し合わせててもいないのに、家を出るタイミングが喪とピッタリ合ひ。

「相変わらず、眠そうね」

「あ？ おめえに言われたくねえよ」

「どうせ、夜遅くまで推理小説でも読んでたんでしょう？」 新名香保里の『探偵左文字 File 45 罪人たちの端を壇（上）』 つてところかじりっ。

え？ とコナンが驚いた顔をする。

「なんでわかつたんだ？」

「昨日発売日だったから」

「それだけで？」

「それだけよ」

哀は、本当にそれだけでわかったのかよ？ と本気で驚くコナンを見た。

本当は、それだけではないのだが。

「あなたの嬉しそうな顔を見れば、すぐわかるわよ

「……流石、俺の彼女だな」

「……バカ」

そんなことを話しながら歩いてくると、あつとこう間に歩美たちとの待ち合せ場所に着いた。

「哀ー、コナン君ー、おはよーーー！」

「おはよー、歩美」

「はよ

朝テンションの低めなコナンと哀と違い、歩美はいつもハイテンションだ。

「あ、ねえねえ哀、コナン君からパーティのこと聞いた？」

「ええ、聞いたわよ。今度の日曜日でしょ？」

「あ、その予定だつたんだけど、光彦君も誘つたら、その日は塾があつて行けないって言つてて。で、『いつなら大丈夫なの？』って訊いたら、『五月四日の『ゴールデンウイークなら大丈夫だと思います』って。だから、五月四日に変更していいかな？』

「円谷君も大変ね……。私はいいけど」

「コナン君は？」

「俺も大丈夫だぜ」

「よし、じゃあ決まりだね！ 一人ともありがと！ 光彦君にもそう伝えておくね！」

それからしばらくして元太が到着し、四人で学校へ向かった。

・ · ·

「ゴメン灰原さん、ちょっとといいかな？」

三時間目終了後の十分休み、哀はクラスの女子に声をかけられた。けつこう顔のかわいい、おおたけゆい大竹唯おおたけゆいという子だった。

「いいわよ」

少しの間考えたが、哀は唯に了解の返事を出し、一緒に屋上に向

かつた。

屋上に出てみると、風が強く吹いていた。そういえば台風九号が東京にも近付いてきていたと今朝テレビでやっていたような気がする。

( 帰り、ちょうど風雨が強いときにならなければいいけど )

哀はそういう思いながら空を見上げる。薄い灰色の雲がもくもくと出ていた。風がより一層強く吹き、哀の綺麗な茶色の髪がなびく。

「 灰原さんって、最近ちょっと調子のいい感じですね 」

教室を出でからずつと無言だった唯が、ここではじめて口を開いた。

「 は? 」

哀は不機嫌そうに返事を返す。哀のその態度にムツとしたのか、唯が先ほどよりも少々荒い口調で言った。

「 じょけてんじやないわよー この前の体育の授業のとき、あんたが口ナカン君に言つて寄つてゐるの、私たち見たんだからー 」

哀は、唯の言つてこむこと、おかしなところがあるのを氣づいた。  
（ 私たち……？ ）

「 みんな、出てきてー ハイツ、痛めつけちゃおつー 」

唯が声をかけると、ざつと十人ほどの女子が出てきた。みんな髪を派手な色に染め、スカートを切つて短くしてこる。帝丹高校では

禁止されていいるアクセサリーも身につけていた。ついで、授業をサボっている（哀と「ナンもたまにサボるが」）。いわゆる、不良と云つやつだ。

「唯、最近「ナン君に言ふ事が多いから、マイの「ハ」。

「私の髪、染めてるじゃねえの？？」

「付き合つてゐるわけでもなこへせり、「ナン君に纏わつてんじやねえか？」

女子達が口々に叫ぶ。……いや、付き合つてゐるのだが。

哀は、少女たちの言動を見て、「ここにいる女子たち全員が「ナンのことを好きだとわかった。

「なに意味不明なこと言つてゐる？ そんなくだらない用件だったら、教室に帰つていいから。」

哀が強気な態度をとると、唯たちが明らかに雰囲気を硬化させた。

「なんだと？」

「やつちやんちやんちやん！」

その声を合図し、女子たちが一斉に哀に襲いかかってきた。

哀が覚悟を決めて目を瞑つた、その時。

「おおえり、ハジマしてんだよー。」

「哀！ 大丈夫？」

「コナンと歩美が、屋上のドアを開け放つて哀の方へ向かつてきた。

「コ、コナン君……！…… どうしてここに……」

唯の慌てた様子には田もくれず、コナンと歩美は哀のところにかけより、声をかけた。

「灰原！ 大丈夫か？」

「ええ……」

「怪我していない？ 保健室行く？」

「いえ、大丈夫よ……」

「コナンが哀に手を差し伸べる。哀はその手につかまり「ちょっと、待ちなさいよ！」「逃げてんじゃねーよ！」などと呟んでいた唯たちを無視して、歩美とコナンとともに屋上を出た。

「……で？ これからどうするの、コナン君？」

「 そうだな。もうチャイム鳴ったから、いまから戻ると多分教師に説教されるぜ。確か今の時間は数学。数学の担当はあの優果とかいう教師、だな。このままサボんねえ？」

「 そうね、それがいいわ」

即サボりたと決断したコナンと哀に、歩美は一人困惑した。

「えーー!? 一人とも、授業でないのーー!?」

「え? 歩美は出んのか?」

「コナンは驚いた。 てっきり、歩美もサボるものだと思つていた。

歩美は小さく頷く。

「うん……。私は一人みたいに頭よくないし、出よつかな」

「そう。歩美は歩美のやつたいことをやればいいわ。サボりたくなあんだけたら授業に出ればいいし。 でも、あの優果とか言う教師には気をつけてね。じゃ、私たちは図書室にでも行つてゐるわ」

「おう、じゃあな、歩美」

「うん、バイバイ! 哀、コナン君!」

「ううして、コナンたちは歩美と別れた。

これから歩美の身に、どんなことが起きるのかも知らずに。

## No.15 いつもの光景（後書き）

こんにちわ。

評価＆お気に入り登録してくださった方、どうもありがとうございます。

灰原サンと江戸川サン、家を出るタイミングがピッタリ合つなん

て……  
流石、運命共同体

次回もよろしくお願いします。

歩美が「ナンたちと別れて教室に入つていくと、生徒と優果がドアの開いた音を聞いて一斉に振り返つた。

田立たないよう、前のドアからではなく後のドアから入つたが、びつやらぢぢから入つても同じだつたようだ。ドアを開けるときのガラガラという音で、みんなが気づく。しかも、休み時間ではない、授業中という静かな時間ではなおさら田立つ。

まだ総合とか、道徳の授業であればみんなしゃべつていてそれでも田立たない方なのだが、今は数学。みんなが一番集中する授業だつた。

優果が、黒板にチョークで字を書く手を止めて、歩美のほうを見た。

「吉田さん……。びつじて授業に遅れたのかじりっ。」

表面上は微笑みかけて訊ねているが、内心は絶対にイカついているに違いない、と歩美は思った。

「えつと、じょつトイ

「嘘ですね」

歩美が「トイレに行つてました」と言ことわる前に、優果にあつた  
り嘘を見破られる。

「 吉田さん、ひょっと先生とお話をしましちようか」

優果は「みなさんは今度のテストに向けて自習をしていくださ  
い」と残された生徒たちを振り返つて言い、歩美と一緒に教室を出  
た。

しばらく歩き、着いた場所は一階の職員室の近くにある、滅多に  
使われない会議室だった。

「あい、と……。吉田さん、改めて訊くけど、あなたはなぜ授業に  
遅れたのかしりっ。」

「…………」

歩美は、哀とロナンと一緒にいたことを語りれないようこそ、懸  
命に無言を貫ぐ。

「言いたくないのね……。じゃあ、私があててあげましょうか。ど  
うせ、あの灰原哀とかいういつも期末テストで満点ばかりとつて、  
学年一位になつたからって調子にのつてゐる子と、江戸川君と一緒に  
つたんでしょう？」

歩美が、思わず息を呑む。その様子を見て、優果はふん、と歩美  
を嘲笑つた。

「 やつぱりね。あなたたち一人には、前々から目をつけていま  
した。随分と問題児のようでしたからね」

確かに、哀と歩美はピアスの穴を開けたり、スカートを指定より短くしたり、部活も「用事があります」といつてサボって、一人で放課後にウインドウショッピングをしたりしている。

だが、それは他の子もやっていることだ。

歩美はふと、優果の発言に気になる点を見つけた。

「……先生、あなたたち一人って、私と哀のことですか？ ノナン君を入れて、三人じゃないんですか？」

「あら、江戸川君とあなたたちと一緒にすること思つたら、大間違いよ。私、彼には目をかけているんだから」

優果はペラペラとよくしゃべった。

「江戸川君。彼は、素晴らしいわ。生徒としても、男子としても、成績優秀、運動神経も抜群。音楽はあまり得意ではないみたいだけど、バイオリンは天才的に上手い。顔もいい。人間関係も良好。まさに、完璧だわ」

歩美は疑問に思った。優果は、歩美が他の先生や校長に告げ口するとは思わないのだろうか。

「ああ、他の人に言おうなんて考え、起こさないようにね

優果が、歩美の考えを読んだかのように突然笑つてそう告げた。

「え？」

「 あなた、江戸川君と灰原哀、それに小嶋元太と随分仲が良いらしいじゃない？ あなたが他の先生や親に、私が江戸川コナンを特別扱いしている、なんて言つたら……私、あの一人に何かするかもしねないわよ？」

「 なにか、つて？ なんですか？」

歩美が、顎を震わせながら問う。

「 そうね。……たとえば、小嶋元太」

優果の口から出た「小嶋元太」の名に、歩美は一瞬肩を震わせた。

「彼、体育の成績は素晴らしいけど、それ以外はさっぱりでしょ？ この前、七組の担任の細川先生に聞いたはなしだと、小嶋元太は推薦で米花大学狙つてるらしいじゃない。まあたしかに、あそこは体育系に力を入れているから、小嶋元太なら学力がなくてもギリギリいけると思うわ……」

いくら元太の担任に訊いたとしても、なぜ優果はそんなことで知っているのだろう。歩美だって、つい最近知つたばかりなのに。

大体、違う組の元太と歩美たちが仲がいいというのも、入学してまだ一ヶ月も経っていないのに把握するのはほぼ不可能だ。

なのに、なぜ優果は。

「でも、あなたが他の先生に告げ口なんかしたら、ねえ？ 私、教師なのよ。教師って、生徒の調書とか、いろいろ書かなきゃいけな

いの。私が細川先生に、『元太君、最近私の授業をサボりがちで……』なんていつたら、ギリギリ合格できたかもしれない米花大学も、受からなくなっちゃうかもねえ？』

将来柔道選手を目指している元太は、大学でさらに力をつけるつもりだと、歩美に笑顔で話していた。

優果は、元太のその夢を妨げるといつのだ。

「そんな……酷い」

「大切な親友の夢を打ち碎きたくなければ、これから私のいじりに従つてもらおうかしら？」

優果は、歩美の目を見てにっこりと微笑んだ。

「わかつりました。でも、元太君には、手を出さないで……」

歩美は、彼女の出す条件に従つしかなかつた。

優果が条件をいくつか出したといひで、授業終了を告げるチヤイムが鳴り響いた。

「あら、もう時間なのね」

「じゃあ、吉田さん、いまの条件忘れないでね

優果は、クラスの男子生徒のほとんどが見惚れてしまつような笑みを残して、二階にある一年教室へもどつていつた。



Rukaです。

歩美、ガンバ！

優果に負けるな～～！！

最近、小説ばっか書いてるので、夏休みの課題とかいう存在のものが全然進んでません……。

そろそろヤバイと思われます。

感想、評価等待ってます

「はい、みなさん、やめてください！ じゃあ日直の人、号令お願  
いします」

歩美が教室に入り、自分の席に着いたタイミングで、優果が自習  
をしていた生徒に声をかけた。

優果は、教室に入るといつもの態度に戻っていた。さつき、歩美  
を脅していた人と同じ人物とは思えない、見事な切り替えっぷりだ。

日直が号令をかけ、三時間目終了の挨拶が終わつたところで、歩  
美はみんなが不審そうに自分のことを見ている視線を振り切つて、  
急いで教室から抜け出した。

これ以上優果と同じ空間にいるなんて、耐えられない。「歩  
美、どこ行くの？」とクラスメイトの伊藤有咲いとうあいさきが訊ねる声が聞こえ  
たが、もう無視だ。

歩美は走つて、教室から大分離れたところまで来ると、大きく息  
を吐いて立ち止まつた。

（ どうしよう……。コナン君に相談したほうがいいのかな……。  
でも、告げ口すると、元太君が……）

歩美は、恐怖で顔を強張らせた。

「あれ、歩美じゃん。お前、ちゃんと教室戻れたか？」

そのとき、歩美は、ちょうど階段で図書室から降りてきたコナンと哀と鉢合わせた。どうやら、混乱してがむしゃらに走つてこるつちこち、二階の図書室へと続く階段の踊場に出たりしき。

「…………え、あ、うん……。ちよつと先生に怒られちゃつたけど、なんとか大丈夫だつたよ……」

珍しく霸氣のない歩美の声に、哀とコナンは不審がる。

「どうしたの歩美？ なんだか、元気がないみたいだけ……」

哀が、歩美の顔を覗き込む。

「あ、ちよつと風邪気味で……。でも、熱ないし、大丈夫だから。頭が痛いだけ。心配しないで。 私今日早退するね。先生にもそう言つておいて……」

歩美は、早口で焦つたように告げると、スクール鞄も持たずに玄関の方へ走つていつてしまつた。

「歩美……」

「コナンが叫んだが、歩美は立ち止まらなかつた。

「歩美、どうかしたのかしら……」

「　様子、変だよな？」

残されたコナンと哀は、自分たちと別れた後に歩美の身に遭った  
できごとなど、知る由もなかつた。

・　・　・

（あれって……歩美、だよな？）

元太が気づいたのは、二時間目と四時間目の授業の間の十分休み  
のとき。窓側の席の友だちの上原高志うえはらたかしと、くだらないおしゃべりを  
していて、ふと外に目をやつたときだつた。

（　なんか、様子がおかしいな……）

どこか落ち着かない様子で、歩美が校門を指して走つていた。

「……ワリ、高志。俺ちょっと気分悪いから早退するわ

「え？　おい。俺には、お前全然気分悪そう見えないんですけど  
！？」

高志の指摘を受け、元太は少し考えたあと咳を一、二回した。さ  
らに「痛い」と言いながら腹を抑えてみる。

「……お前、それはそれでわかりやすすぎ」

「　う

見事に高志に仮病だといつことがバレた。

「でもまあ、いいよ。先生には『元太君が具合悪そうにしてました  
——』って言ひとべから」

「まじー？ サンキュー、高志ー」

高志が「おう」と返事を返したときには、教室にすでに元太の姿はなかった。一人になった高志は、自分の机に腰掛けた。

「……ていうか、次の授業数学じゃん。元太数学苦手なのに、受け  
なくて大丈夫なのかよ……」

高志がボソッと最後に呟いた一言は、誰にも聞かれることはなか  
つた。

・

「歩美ー。」

校門を出てからしばらく歩いたところで、自分の名前を呼ぶ声に  
歩美が振り返ると、息を切らした元太が後ろに立っていた。

「げ、元太君！？ どうしたの？ 今授業中だよー！？」

「それはこいつちの台詞だよ。歩美、お前こんな時間にどうしたんだ  
よ……。もう四時間目始まつてるぞ？」

「あ、うん。私はいいの。今日は具合悪いから、早退する。クラスの子にもさう伝えて来たし」「

「……具合悪いやつが、普通走るか?」

元太は、ここ数年でものすごく伸びた背をかがめて歩美の顔のところに合わせ、彼女の顔色を見る。

「わ、私が走ってるの、見てたの!?」

「おひ。ビーかしたのか? なんかあつた?」

「な、なにもないと思つけど……」

「嘘だろ。なんか悩みでもあんじやねーのか?」

元太が、本気で心配そうな顔をする。

「…………」

歩美は、悩みを打ち明ることを決心した。

・

「せんせー! 小嶋元太、気分悪くて早退したそーですー!」

高志が、数学の授業をするために教室に入ってきた優果に、大き

な声で叫びかる。

「上原君、それホント?」

優果が、鋭い目つきで高志を見つめる。むつ半ば睨みつけてくる  
よつた感じだ。

「え……どうしてですか?」

「小嶋くん、ホントに真面目そうにしていたの? 假病なんじゃない  
の?」

「いや、気分悪いって言つて、腹押されて咳もしてましたけど?」

自分は嘘を見破つたり、ついたりするのが結構上手い、と高志は  
思つていた。

「 嘘ですね

自分の部屋の障子を破いてしまつたとき「風が強くて、破けちゃ  
つたんだよね」とつて親を誤魔化せた高志だが、優果の前では  
嘘が見破られた。

「……違うまよ。何を根拠に? 先生は、生徒を疑うんですか?」

高志と優果の言ひ合ひに、クラスメイトたちがおしゃべりしてい  
てつるさかつた教室も、次第に静まつていぐ。

「 もつこいです。では、冒今お願ひします」

教室中が『氣まづい雰囲氣』の中で、数学の授業が始まった。

「んにつけ。

高志君が言つていた、「風が強くて障子が破れちゃつたよ。あ  
はは」というのは、私が実際に親に言つたことがあるのを使わせ  
ていただきました。

私のお母さん、「口口と騙されましたよ

次回もよろしくお願いします。

元太と歩美は、学校から少し離れた帝丹公園に来ていた。一人でベンチに腰掛ける。

公園には、近くの保育園から遊びに来ている園児や、先生、保護者などがいて、歩美たちの方を凝視していた。こんな時間帯に高校生が公園にいるのだから、無理もない。

「あのね、元太君。……実は私、今日三時間目の数学を、最初の方ちょっとでないでサボつてて」

「お前が？」

歩美が授業をサボつたというところに、元太は多少驚いたようだ。歩美は中学生のとき、一回も授業をサボつていなかつたので、教師の信頼も結構あつた。

「うん。コナン君と哀と一緒に、ちょっと屋上に行つてたの。で、気づいたらちょっと時間が過ぎちゃつてて。コナン君と哀はめんどくさいからもう三時間目はサボつちゃうつて言つてたの。でも、私は一人みたいに頭良くないでしょ？だから、授業に出よつと思つて、三時間目の途中から教室に行つたの」

哀が大竹唯に暴力をされそになつたところは、なんとなく言わない方がいいと思い、省いた。元太は、歩美の会話を相づちをうつ

ながら聞いている。

「学校の教室のドアって、結構みんなたてつけ悪いでしょ？ 私、目立たないように後ろのドアから入ったんだけど、『ガラガラ』って音がして、みんな振り向いちゃったの。 当然、先生も。その時間は数学の授業だったから、久住優果つていう、私たちのクラスの担任の先生の授業だったの。『吉田さん、今までどこ行ってたんですか？』って訊かれて、私『トイレに行ってました』って嘘ついたよ。でも、なんでかわからないけどあの人に嘘つて見抜かれちゃって」

あのときの優果の目の鋭さを思い出して、歩美は身震いした。人にはんな目を向けられたのは、初めてだ。

「その後、先生と一緒に会議室に行つたの。あの人に『どこに行つてたの？』って訊かれたけど、私はずっと黙秘してた。でもそしたら先生が『あなたが何をしてたのか、あててあげましょうか？』って言つてきて。私、ホントに何もしゃべつてないの。何にも言つてないのに、コナン君と哀と一緒にいたこと当たられちゃつたの」

元太が目を見開いた。 そんな読心術みたいなことをできる人がこの世にいるのか。

「びっくりしたよ、私。だって、自分の行動が全部あの人によく知られちゃつたんだもん。そうしたら、あの人、いきなりペラペラしゃべりだしたの。コナン君のこと結構気に入つてるとか、私と哀のことが気にくわないとか。私、不思議に思つたよ。『この人、こんなにしゃべって、私が親や他の先生方に言つちゃうと思わないのかな？』って。でもそうしたら、またあの人人が人の心を読んだみたいに『他の人に言おうなんて思わないことね』って言いはじめたの。このこ

とを誰かに告げ口したら、……大変なことになりますよ、つて

あの人があん太の将来の夢を妨げようとしていることは、言えなかつた。言つたら絶対あん太は「俺のことなんて気にしないで親に言つちやえよ！」と言つに違ひない。そんなことをして、あん太の夢を妨げたくなかつた。

「そつか……お前も大変だな」

「……うん」

「俺、なんにもできないけどさ、またあの優等とかいう教師になんかされたら、また俺に言えよ」

「うん……」

歩美の頭をなでてているあん太の手が大きくて、妙に安心感があつた。

「行」うぜ。俺、歩美の家まで送るからよ

「うん……」

あん太の優しさに、歩美はただただ頷く」としかできなかつた。

・ · ·

「起立ー。」それで四時間目の授業を終わります。礼ー。」

「あいがとハレコました～！」

日直が号令をかけ、四時間目授業が終わる。授業の挨拶をきちんとこころの生徒なんて、よく僅かだ。日直と一部の生徒以外は、声を出さずにボーッと立っているだけか、もつと悪ければ立たずに入生徒も中にはいる。

哀とコナンは、三時間目だけではなく四時間目授業もサボった。四時間目間に、わざわざこかへ走り去つてしまつた歩美を探していたのだ。

「哀、いたか？」

「いいえ。そっちもいなかつたのね」

「ああ……」

「ナ・ンと哀が困り果てていると、歩美と同じテニス部の有咲あこがやつてきた。

「もしかして江戸川君と灰原さん、歩美のこと探してゐるの？」

「ああ、やうだね……」

コナンが、有咲の言葉に頷く。

「歩美なら、やうきの十分休みにすゞ速で教室から飛び出して行つたよ」

「ええ、それは知つてゐるわ。私たゞ、三時間目の数学の授業、図書

室に行つてサボつたのよ。それで、四時間目は授業に出よつと思つて階段下りてたら、歩美に会つたわ。そのとき、なんか歩美の様子が変だつたから

「あ、私も変だと思つたんだよ。なんか、先生に呼び出されて、帰つてきたと思つたらいきなり教室から出て行くし……」

「え？ 誰が先生に呼び出されたつて？

「ナンが有咲の言葉に驚く。

「歩美。歩美も三時間目の数学の授業、最初の方サボつててさ。それで、先生に説教されてたつぽいんだよね。まあ、私も詳しくは知らないんだけど」

「……伊藤さん、あなた、歩美の様子いつから変だつた覚えてる？」

哀が、有咲から出る情報を一言も漏らさないようこと慎重に聞く。

「つーん、三時間目の途中から授業にきたんだけど、そのときは普通だつたような気がする。先生に呼び出しきりつて、帰つてきてから様子がおかしかつたかも……」

有咲の言つ「先生に呼び出されて、帰つてきてから様子がおかしかつた」というのが本当なら、歩美の様子がおかしくなつた原因は、まず優果にあると見て間違ひなさそつた。

「そつか。サンキュー、伊藤！」

「ありがとね、伊藤さん」

一人は有咲からの情報をしつかり頭に入れる、教室を出て行つた。

じんにちば。

Rukaです。

最近「哀要素」が少ないよつな……??

優果サンと歩美ばつか出てますね。

次回もよろしくお願いします。

「失礼します。一年六組の江戸川です」

「……同じく、六組の灰原です」

昼休みで、みんなは弁当を食べている時間だというのに教室から出て行つたコナンと哀が向かつた場所は、職員室だつた。

「久住先生に用があつて来ました」

名前を呼ばれた優果は、コナンと哀の姿を見るとこり笑つた。

「あら、二人とも。どうしたの？ 今はお弁当の時間でしょ？ 時間なくなるけど、食べなくていいの？」

「ええ。今すぐ、先生とどうしても話をなければいけないことがあるので」

哀が優果の田をまつすぐ見る。哀と田があつた優果は、ふつと笑つた。

「そひ。じゃあ、会議室にでも行きましょうか

優果の言葉に、三人は連れ立つて会議室に向かつた。

会議室は、会議に使われることが目的なだけあって、椅子や机が結構たくさんある。哀とコナン、優果はそのたくさんの椅子のうち、一番ドアに近いところにあつた椅子三つに腰掛けた。

「わい、と……話して何かしら？」

「歩美のことです」

哀は親友のことになると、ものすごく気が強くなる。不気味な笑みをもらして、優果に少しもひるまばにズバッと言つた。

「ああ、やっぱりね……。そのこと」

「はい。まず、あなたは歩美に何を言つたんですか？ 彼女、三時間目と四時間目の間の休み時間のとき、帰つてしまつたらしいんですけど」

哀のその問いに、優果は笑つた。

「わう、帰つてしまつたらしいわね……。でも、それは私と関係ないんじゃないから？」

「関係大有りです。歩美と仲のいい子が、三時間目の数学のときに、あなたと歩美が一人でどこかに行つた後から歩美の様子が変になつたと言つていました」

「それは、その子の勘違いなんじゃない？ その程度の理由で私のせいにされちゃ困るわ」

哀は納得いかないといつ顔をしたが、コナンは優果の言つことだが

少し理解できた。 たしかに、それだけでは、理由として足らぬ  
い。

「……じゃあ先生。三時間目の途中で、彼女と一緒にどこかへ行つ  
たらしいですね。どこへ行つて、何を話していたんですか？」

「 流石、江戸川君。いいとこついてくるわね。でも、そんな大  
層なことは話してないわ。私は彼女を会議室に連れて来て、授業の  
最初の方をサボつたこと、注意していただけよ」

「ナン」と哀が優果をじっと見る。 もし優果が言つていることが  
が本当なのであれば、彼女のとつた行動は「生徒の教育」以外なに  
ものでもない。

だが、もし違つてゐるのなら。

「じゃあ、話はこんなところでいいかしら? もし忙しいし

「ごめんなさいね」と謝りながら席を立つ優果を、哀が怒りのこも  
つた目で睨みつけた。

「 今日の放課後、歩美の家に行つてきます。歩美に、本当に先  
生にサボリのことを注意されただけなのか、聞いてきますか」

もし先生が言つていたことが嘘だつたら大問題ですね、なんてい  
う哀にも全く臆さずに、優果は綺麗に笑つた。今まで見た中で、一  
番綺麗な笑みだ。

「どうぞ、ご自由に。でも、もし私が吉田さんに注意する以外のこ  
とをしていたとしても、それを彼女が素直にあなたたちに相談する

と思つたら、大間違いよ

「 大丈夫です。私も江戸川君も、歩美を信じてますから」

哀は素早く身を翻し、すでに席を立つていた優果よりも先に会議室を出て行つた。コナンも慌ててあとに続こうとした、そのとき。

「 ……え？」

「コナンの耳元で、すくなく小さな声で優果が何か囁いた。

「先生、今なにを」

「ちやんと聞こえてるはずよ。 私、待ってるわ」

コナンがもう一度聞き返さうとした、そのとき。

「江戸川君！ さつさと教室に戻るわよーー！」

廊下から、先に出て行つた哀の声が聞こえた。

「あ、わりい！ 今行くからー。」

コナンは優果を少し振り返り、会議室を出て行つた。

一人残された優果は、その口許に不気味な笑みを浮かべていた。

「 まったく、あの教師、ホントなんなのよー！？ ナニサマのつ

もりよ！？『それは、その子の勘違いなんじゃない？ そんな程度の理由で私のせいにされちゃ困るわ』って、理由は理由でしょ！？『れも立派な理由！なのに、なんであんな変な教師にじりゅやじりゅや言われなきやいけないの！？』

なんか哀のキャラが微妙にずれています、とコナン（とRukia）は若干思つたが、この際つっこまなかつた。

たしかに哀の言つとおりだとコナンは思つた。だが、頭で冷静に考へると、やはりその理由だけでは足りない。

「とにかく、今日歩美の家に行つてはつきりさせなわよ。江戸川君、今日はいくら一年生にしてサッカー部のエース候補と言つてこるあなたにも、部活サボつてもひりから」

「……マジっすか、灰原サン」

「あのクソ優果の言つてたことが嘘だつたら、どうしてくれようかしら。 ああ、そういうえば、ちゅうどこの前新薬ができたのよね。名づけて『即効！－ ビリビリ薬！－』。普通は長時間正座していること足はしごれないなど、この薬を飲むと三十秒間正座しただけですぐにじびれてしまつという薬品よ。本当は江戸川君で試そうと思つてたんだけど、あのクソ教師で試すのもいいかもしないわ」

コナンは恐怖で震えた。 ロ、コイツ、俺で試すつもりだったのかよ！？

「とにかく、今は歩美よ。終学活が終わつたら、すぐに歩美の家まで行きましょ！」

さつさまでキャラを変えてグチグチ言っていた哀が、いつもの調子に戻る。

「 ああ」

「ナノは返事をすると、哀と一緒に教室へ戻つて行つた。

じんにちば

なんか後半の灰原サンのキャラが崩れると……！  
やっぱり歩美ちゃんが絡むと性格変わりますね。

読んでくださいありがとうございました。  
評価待ってます

「お邪魔します。歩美、いる？」

放課後、部活の顧問に「今日は用事があつて……すみません」と  
いつて部活をサボつたコナンと哀は、歩美の家に行つていた。

玄関のチャイムを鳴らして歩美を呼ぶ。奥のほうからガサガサ  
と人の気配がし、部屋から人が出でくる。

「あれ？ 灰原とコナン？」

登場したのは、歩美でも彼女の母親でもなく、なんとか元太だつ  
た。

「え？ 小嶋くん？」

「はあ！？ 元太！？ なんでお前にいるんだよ？ 部活は？」

「ん、ああ、サボリ。つていうか、俺四時間目が始まる前に早退し  
たけど」

元太の言葉に、哀が珍しく質問した。

「え、でも。ちょっと待つて。小嶋くん、あなた今までずっと  
ここにいたの？ ……四時間目が始まる前つてことは、今日は

六限だったから、四時間以上ここにいるつてことよね？ そんな長時間何してたの？」

「……玄関で話すのもなんだし、とりあえずお前ら入れよ」

元太に言われて「ナンと哀は歩美の家のリビングに入った。

「歩美は、いま寝てる。なんか疲れてたっぽいから」

「……やつ」

哀は、元太の話振りからして歩美が無事なのを悟り、とりあえず安心した。歩美が優果に精神的ショックを与えていたとしたら、元太はもっと深刻そうな顔をするだろう。

「で、質問つてなんだけ？」

「あなた、ここまで歩美の家で何をしていたの？」

哀が、元太を少々キツイ目つきで見ながら（俗に言つて「睨みながら」）言つた。

「あんな、俺が何で学校を早退したかっていうと、歩美を見たからなんだ」

元太は、リビングの薄い青色のソファにズシツと座つた。コナンと哀は「はあ？」という顔をした。歩美を見た？

「こつ? ピン?」

「俺、三時間目と四時間目の間の十分休みに、窓際でクラスのやつと話してたんだ。そしたら、校門のところをダッシュで走ってる歩美が見えてな。 アイツがこんな時間に校外に出るなんて、絶対におかしいと思って、俺も早退して歩美のあとを追ったんだ」

元太が話していく間に、コナンと哀も元太の近くの床に座る。

「追いついて、『歩美!』って名前を呼んだら、アイツ振り返つてる。顔を見たら、泣いてはいなかつたけど、思いつめた、暗い顔してた」

哀は、そのときの歩美の様子を想像し、後悔した。 自分があのときサボらずに、歩美と一緒に教室に戻つていれば。

「で、とうあえず話を聞こいつと思って、一人で公園に行つたんだ。そこで、歩美から大体のことは聞いた。 歩美がお前達と一緒に屋上に行つてて、三時間目の授業が遅れたこと。教室に戻つたら、優果つていう教師に呼び出されて、会議室に行つたこと。それから、会議室で、優果がコナンを気に入つてるつて知つたこと。あの優果つてやつが、灰原と歩美をよく思つてないこと。 あと、そいつに脅されたこと」

「 ちよつと、脅されたですつて!？」

哀が、今までにないくらいに興奮した口調で言つ。床に座つたのに、興奮のあまり立ち上がつていた。

「ああ。どんな内容で脅されたのかは言えないつて言つてた。とにかく

かく、優果が「ナンのことをお気に入りだとか、灰原と恭美のことが嫌いだとか、そういうことを他の教師や親に告げ口したら、まずいことになるらしく」

「 そんなの無視すればいいのよ！ あんな教師が言つたこと！ ！」

「 いや、それは駄目だ」

興奮する哀と元太に、落ち着き払つた声でコナンが告げる。

「 どうして？ なんでよ、江戸川君」

「 脅された内容がどんなものかわからない今の現状では、こちらが不利になる可能性が高い。 例えば、誰かを殺す、とか。あの先生を捕らえたとき、ナイフを持っていたら刺される。人が一人死ぬかもしれないぜ？」

「 ありえないでしょ、殺人なんて」

「 例えばの話だ。確かにありえないかもしないけど、可能性は決してゼロではない」

「 ナンの言葉に、哀は唇を噛みしめた。 どうやら、しぶしぶでも納得したようだ。

「 ..... 江戸川君、下手に告げ口したり捕らえたりするのが得策じゃないことはわかつたわ。 でも、じゃあどうすればいいの？？」

哀が珍しくヤケクソになつてコナンに訊ねる。

「 とりあえず、今は歩美に脅された内容を聞くのが先決だ」  
そういうて、「コナンが床から立ち上がった。それを見た元太はぎ  
よつとした。

「 おい灰原、歩美の部屋ついていただよな?」

「ええ、そうよ」

「俺、ちょっと歩美と話してくるわ。お前らはここに残つ

「あ、コナンちょっと待て!」

元太は慌てて「コナンの行く手を遮つた。 今歩美を起された  
ら、俺が気まずい!」

「なんだよ元太」

「歩美、ホント疲れてんだって! 賴む、聞くのは明日で!」

何度も頼み込む元太に、コナンはあつさり引いた。

「あ、そななのか? 悪かつたな……。じゃ、明日にするわ

「お、おう。サンキュー」

哀は、「コナンに頼み込んだときの元太の顔が紅いのに気が付き、  
不審に思った。

「よし、じゃあもつ帰るか、灰原」

「ええ、そうね」

「コナンに声をかけられ、哀は荷物をまとめて出る準備をする。

「元太は？」

「あ、俺は歩美の母さんが帰つて来るまで待つてるよ」

「そつか。じゃ、氣をつけて帰れよ」

「おひー。」

哀は、自分の荷物をまとめ終わつたよつて、コナンの鞄をとつて  
「はい」と手渡した。

「お、灰原サンキュ。じゃーなー元太ー！」

「さよなら、小嶋くん」

「おひー。また明日な、コナン、灰原ー！」

夕日がもうすぐ沈む頃、コナンと哀は歩美のマンションから出た。

元太の顔が紅かつた理由がわかるのは、もう少し後になる。

「……あの人気が会議室で私たちとしゃべつてたときには、うふふふ氣

持ち悪い笑みを浮かべてた理由がわかったわ。の人、歩美を脅したから私たちに言うつもりがないと知っていたのよ」

歩美の家を出てしばらく歩いたところで、哀が独り言のように呟いた。

「ああ、そうだな」

「久住優果……。の人、絶対に許せないわ」

哀は眉根を寄せて険しい顔つきで言った。

じんにちは。  
Rukaです。

今回でちょうど二十話ですー。  
わーい

これからもよろしくお願ひします。

「ただいま。……って、あら、元太君じゃない」

時刻は午後七時。最近パートをはじめたといつ歩美の母親が帰ってきた。

「どうしたの、こんな時間に？」

「あ、歩美今日具合悪くて、学校早退してきたんです」

「あら、やうなの。もしかして、元太君が歩美を家まで送つてくれたの？」

「え、はい、まあ……」

少々歯切れ悪く言った元太だったが、歩美の母は天然なのか、全く気になった様子はない。

「そうなの。ありがとうね」

穏やかに微笑む歩美の母は、四捨五入するともう四十歳になるらしいが、そんなようには全く見えなかつた。

「ああ、元太君タ」飯食べていく？ おばさん作つてあげるわよ。

今日はハンバーグなんだけど、好き嫌い大丈夫?」

「ここに」と笑いながら「すぐ準備するから」といつてキッチンへ行ひのとする歩美の母を元太が呼び止めた。

「あ、結構です。俺もう帰るんで」

「えー!? あらまあ、帰っちゃうの? それは残念ね」

なんとなく歩美のお母さんは憎めない、と元太は思った。ちょっと「ナンの母ちゃんに似てるかもしね」。

鞄を持って玄関に行く元太を、歩美の母親が見送りした。

「また歩美と遊んであげてね?」

元太は靴を履く手を止めて優果の母を振り返り「はい」と返事をした。

「じゃあ、おじやましました」

「はいはーい また来てね~」

歩美の母は、愛想良く手を振つて元太を送つた。

元太を見送つた歩美の母は、歩美の部屋にそつと入つた。

「歩美、起きてる? 具合はどう?」

「お母さん……」

布団をかぶって寝ていたように見えた歩美が、起き上がりてくる  
りと母の方を振り向いた。

「あ、起きてた？ 起こしてさやった？」

「お母さん、帰ってきてから元太君としゃべってひるむとかつ  
たから、起きた」

歩美が心底迷惑そうな顔で告げる。

「あいせつ、」めぐね

「ホントだよ……」

「夕飯なにがいい？ あ、お粥作るつか？」

「大丈夫……。夕飯いらないや」

歩美はそういうふたたべ入るべッドに入り込んだ。

「そう？ じゃあなんか食べたいものある？ プリンとか、アイス  
とか」

「うーん、得になんもないよ」

「そつか。じゃあゆづくつ休んでね」

「うん

歩美は、寝ようと思つて瞼を閉じた。

「あ、やつやつ

歩美の部屋を出ようとした母が、思に出したよひふと振り返る。

「ん？」

「元太君、歩美のこと好きみたいよ？」

歩美は突然のことに対する思考が一瞬止まる。

「え

思わず母を凝視する。

「もひ、歩美もモテるわね」

歩美の母はふふふ、と口許におもしろそうな笑みを浮かべた。

「じゃーね」

唚然とする歩美を置いて、母は去つていった。

「お母さんに言われなくても……今日元太君に言われたから、元太君の気持ちなんて知つてたよ」

母がいなくなつて静寂に包まれた部屋で、歩美は一人呟いた。

「なあ歩美……」

「なに?」

元太と歩美は帝丹公園を出てから、一人で歩美の部屋にいた。歩美はベッドに寝ていて、元太は椅子に前後逆 背もたれの部分に腹、背もたれのない前のほうに背中 で座っている。

「俺、お前に言いたいことがあるんだけど……」

「なに? 元太君」

言いにくそうに口ごもり、椅子をぐるぐる回転させ出した元太を、歩美が促す。

「好きなんだ」

「は? なにが?」

「……お前が」

「え?」

ぽかんと口を開けて元太を見る歩美に、彼は椅子の回転を止めて苦笑にする。

「俺、お前のこと好きなんだけど……」

「…………？」

歩美は絶句する。 そんなこと、全然わからなかつた。

「お前、俺の気持ちなんて気づいてなかつただろ？」

「…………うん」

「だよなあ。 お前、コナンしか見えてないもんな」

元太は椅子を歩美の顔が見えるようにして止めた。

「…………」

「俺のことなんて、眼中にないんだもんなー」

「…………そんないじと、ない、よ」

元太は歩美のまづを向いた。

「いいよ。 気使わなくて。 でも、俺の気持ちは知つといてほしかつたから」

「…………うん」

「返事とかは別にいいからや。 お前はゆづくつ休めよ」

「……うん

返事をすると、歩美は目を閉じた。

「おやすみ」

元太は歩美の頭をなでて囁くと、部屋を出た。

・  
・  
・

「 唯、ちゃん？」

「ナン」と哀が歩美の家にいた頃、帝丹高校では、放課後時間があつたので、教室で友だちとしゃべっていた大竹唯が、担任の久住優果に呼ばれていた。

「なんですか、先生」

「ちょっと用があるんだけど。来てくれないかな？」

「……わかりました」

唯は、優果について会議室に向かう。表面上はいつもどおりの顔をしていたが、内心不安でいっぱいだった。

（ もしかして、私が灰原哀を屋上に呼び出したこと、ばれた？）

江戸川「ナン」と吉田歩美と灰原哀が三人でチクつたか。面倒

な」となった。

「で？ 先生、用つて何ですか？」

「吉田歩美と灰原哀のことなんだけど」

ほら、やつぱりきた。LJの先生にLJの前のLJがばれている。

「あなたがこの前灰原哀を呼び出したことは知つてゐるわ」

「…………はい」

「協力、してくれない？」

「…………え？」

唯は拍子抜けした。 協力？

「私、灰原哀と吉田歩美のこと、嫌いなのよね。だから、唯ちゃん  
と気が合うと思つの。どう？」

「…………」

この先生は、灰原哀と吉田歩美のことが気にくわない。私も、  
あの一人は嫌いだ。この先生とは、気が合うかもしれない。唯は、  
これはそこまで悪い話ではかもしれないと思つた。

「 わかりました。では、なにを協力すればいいんですか？」

「…………それは、後ほどメールで。アドレス教えてくれる？」

「はい。私のアドレスは

」

いひして、放課後の会議室で怪しい取引が行われていた。

いたにちは

Rukaです。

夏休みの宿題で、読書感想文と短歌（3つ）と俳句（3つ）、美術の「夏のスケッチ」などなど……が終わっていないので、しばらくPCをいじらないようにしようと思っています。

得に短歌……これは強敵です。  
全然思いつきません。

あと、夏休み終わりに国語と社会と理科のテストがあるので、そのテスト勉強もしようと思つてます。

ではではしばりやよつなり。  
再会（再開ー）ます月中にできるよいつします。

次回もよひしへお願いします。

「え……休む?」

歩美から学校を休むとこりう内容の電話がかかってきたのは、朝の七時半ちょっと前。哀がもう少しで阿笠邸を出る、とこりうタイミングで。

『わ。わ。まだ調子が良くなくて……。でも、明日には多分いけると思つかい』

「……わ。お大事にね」

一瞬の沈黙の後、哀はそう返した。

『うん。ありがとうございます』

哀は歩美との会話が終わるとケータイを閉じた。時計を見ると、いつも出る時間より三分ほど遅れている。

「博士、行つてきまーす」

「お、氣をつけていくんじゅよ」

( これじゃあ江戸川君と一緒に待ち合せ場所まで行くのは、

「無理ね……」

哀は、「今日は部活なこから、少し早めに帰つてくれるわ」と博士に言しながらも、頭の中ではコナンのことがばかり考えていた。

（でも、今から走つていけば途中で会えるかも）

そんな淡い期待を抱いて、急いで阿笠の部屋の扉の扉を開けた。すると。

「よつ、哀

なんとかコナンが立つていた。

「え？ あなた、なにで」

「おめえが来るので待つてたんだ

「やつ、なの……ありがと」

哀は顔を紅くする。が、それを誤魔化すよう軽く咳払いをする。  
「あ、歩美今日来るわよ

「やつなんだ……」

「ナンと哀はお互に皿を合せせる。

「やつぱ、アの可能性によな

「ええ……」

哀は目を伏せる。

「 優果のせいや、絶対」

「……まあ、多分そうだよな

「あのクソ教師、今日こそ絶対歩美を脅したことを見たことを白状させてやるわ」

そう言った哀は、温泉に行つたときに殺人事件が起つて、コナンが女湯に入つたあの事件のときと同じような目をしていた。

・

『これから生徒朝会を始めます。朝の挨拶、榎本実咲さんお願いします』

帝丹高校では、毎月一回生徒朝会といつものが行われる。はじめにある朝の挨拶は生徒会書記が、司会進行は生徒会副会長が、校長の話の前にある生徒会長の話を（当然だが）生徒会長がやる。

『校長先生のお話、校長先生お願いします』

生徒会長の話は得に何もなく終わり、かつぶくのいい四十代後半くらいの校長が壇上に上がる。ステージ上に上がるための階段を上るのも、腹が出ていて結構きつそうだ。

『オホン。えー、皆さんおはよー!』ぞいます。えー、最近、ですね、えー地域の方から、えー「帝丹高校の生徒さんは挨拶がいいですね」とよく言われます。が、えー、その一方で、えー「夜遅くにコンビニの入り口のところで屯している生徒さんを見ました」とか、えー「タバコを吸つてました」とかいうこともよく言われます。えー、』

コナンは欠伸をした。工藤新一だつたころにいた、前の校長の方がよかつた。話の長さはどちらも長いが、内容が前の人の方が断然おもしろかつた。話し方も巧かつた。

「あら、暇そうね?」

隣でくすくす、といつ声が聞こえてそちらを向くと、案の定予想通りの人が笑つていた。こんな人を小バカにするような笑い方ができるのは、コイツしか知らない。

「あ? なんだよ灰原。お前はあるの校長の話、聞いてて退屈じゃないのか?」

「ええ、全然退屈じゃないわ。すゞく楽しい」

自分の予想に反した答えを言つた哀に、コナンは驚愕した。

「はあ! ? どこがだよ! ?」

「あの人、『えー』つてよく言つでしょ? その回数を数えてたの。今、十四回言つたわ」

「…………」

哀のマニアックな(?)「楽しみ」に、コナンは返す言葉が見つからなかつた。

「他にあるわよ。あの人、文節を変なところで区切る回数とか、つつかえる回数とか」

「……人生充実シテマスネ」

「あら、褒めてくれてありがとう」

そこでコナンと哀は会話を止めた。一人の近くにいた教師がこちらを睨んでいたからだ。

『えー、といつ』と、今回の、えー私の話は終わります』

ながつたるい話が終わり、校長が礼をすると、『くく少數の生徒も礼を返した。

『では、これからこのまま表彰にうつります』

司会進行を務めている生徒会副会長のその言葉に、体育館に集まつた生徒たちは少しがわめいた。

『えー? 今の時期に表彰?』

「珍しいな」

「部活の大会とか、作文とか絵とか、漢検とか英検とかじゃないし

……。なんだらうな?』

あちらこちらで生徒同士の話し声が聞こえる。教師たちは「静かにしないか!」などと怒鳴っていたが、コナンも不思議に思つていた。

(「この時期の表彰つて、なんかあつたつけな?）

工藤新一の時の記憶を引っ張り出してみても、ない気がする。

体育館が再び静まつたところで、校長が口を開いた。

『えー、一年五組、小嶋元太』

「え? 俺?」

『一年六組、えー江戸川コナン、灰原哀、吉田歩美』

「? ?」

元太と歩美は突然呼ばれた自分の名前に驚き、返事もせずに思わず声をあげてしまった。コナンと哀も声には出せなかつたもののお互い顔を見合せた。

『呼ばれた四人 あ、今日は吉田歩美さんは休みなんですか。じやあ三人はステージに上がつてください』

「? おい灰原、このメンバーつてことはよ」

「警察がらみの可能性が高いわね」

「ナンと哀はこそこそ一人で話しながらステージに上がっていく。これを歩美が見ていたら「二人とも内緒話しないの!」とかいつて騒いでいただろ?」

ステージ上に上がり、三人で並んで立つ。校長が礼をし、三人も礼を返す。さつきの校長の話のときは礼なんてしてなかつたが、流石に全校生徒の前で校長の礼を無視するわけにはいかない。

『賞状。少年探偵団殿。あなたたちは、日頃から警察の捜査に貢献し、事件解決に重要なヒントを我々警察に』

校長の言葉を聞き、全校生徒の三人へ向ける視線が変わった。警察の捜査に貢献しているとなれば、たしかにすごい。

『よつてこじに賞します。平成二十四年、四月二十四日』

はい、おめでとう、と校長が賞状を差し出す。

「おい元太、お前取りにいけよ」

「え? 僕?」

「あなた、少年探偵団の(自称)団長でしょ?」

「あ、おひ」

いつもときだけ団長を強調して元太を操る哀を、コナンは尊敬と恐怖の入り混じったまなざしで見つめた。

「これからもがんばってね」

マイクに入らない程度の音量で校長が言った。

「あ、はい」

元太は賞状を受け取るとまた校長と礼を合わせ、賞状を片手に哀とコナンを見た。

「やつたな！ これで内申あがるかな？」

「多分ね」

「多分な」

キラキラと目を輝かせて問う元太に、哀とコナンは同時に返事をする。

「おっしゃ！ じゃあこれで米花大学の推薦有利になるなー！」

「よかつたな」

心から喜ぶ元太を、コナンと哀は弟を見るよつた気持ちで見た。

『警察の人の話によると、少年探偵団の五人はいつも事件に巻き込まれるそうで。この子達の数々のヒントのおかげで事件がスムーズに解決するんだそうですね』

全校生徒からどよめきがおこった。生徒だけでなく、教師たちも唖然としている。

『えーさうに、彼らは爆弾を解体したり、えー銃を持った犯人から逃げたり、車でビルからビルへ飛び移つたりと、えーさもざまなことを経験しているそうです。えー、この数々の功績に、皆さん拍手をしてください』

拍手しない人など誰もいなかつた。皆一斉に拍手をする。

「では、降壇してください」

元太は五組のところに、コナンと哀と歩美は六組のところにもどる。

六組の自分の席に着いたコナンは、周りの女子に思いつきり見つめられた。目で「すごいね！」と訴えている。同じく哀も近くの、主に男子生徒に見つめられていた。今は朝会中なので話しかけてはこないが、教室にもどつたらすぐのことになりそうだ。

コナンと哀は同時に溜息をついた。

皆様お久しぶりです。

Rukaです。

テストは無事終了しました！

理科のテストはA評価がもらえた点でした！  
ほつとしました。よかったです！

国語の漢字テストもまあまあよかったです。

あ、なんかテストのことばっかり書いてあとがきが長くなりそうなので、続きを読む報告のところに書いておきます！

今回の話も、長くなりました。

えっと、多分3000字超えです。

長いほうがいいという方にとつてはよかったですかも。  
短い方が読みやすいという方、「めんなさい！」

表彰はリクエストがあつたので入れてみました。

ちょっと微妙かも。

シン「Tさん、これでよかったです？

次の話も九月中に投稿できたらいいなあと考えております。

読んでくださった方、ありがとうございました。

コナン、哀、歩美の三人は、予想通り朝会終了後クラスメイトに囲まれていた。

今は三時間目と四時間目の間の、十分間の休み時間。十分休みの度に同級生達が探偵団の机の周りに寄つてくる。男子は歩美や哀の席、女子はコナンの席のところに集まつていた。　歩美とコナンは愛想良く話をしていたが、哀はほとんどの人を無視していた。

哀はふとコナンの席を見た。コナンの周りには十人ほどの人だかりができている。

「へえ、じゃあコナン君ってあの大阪で有名な服部平次と知り合いなの〜！？」

「ああ。他にも怪盗KHDとか、白馬探とかとも知り合いだぜ」

「すゞい！」

もともと事件の話が好きな男だ。女の子に「事件の」と、詳しく聞かせて!」と言われば、コナンは喜んで話し出す。

「ねえコナン君、あの校長が話してた『爆弾を解体した事件』って、どんな事件?」

ポニー・テールのかわいい女子が、目を輝かせながらコナンに訊く。そのとき、四時間目の授業開始のチャイムが鳴った。

ほとんどの生徒は席に着くが、コナンのところに泊るポニー・テールの女子はまだ席に着いていない。

コナンは、彼女が先生に怒られないか少し気になった。だが、ここで自分が「チャイム鳴ったし、席に着いたほうがいいんじゃない?」なんて眞面目なことを言つ義務も義理もない。

「ああ、それはたぶん、東都タワーの……」

コナンが話し始めると、廊下から靴音が聞こえた。ポニー・テールの女子は、気づいていない。

「なにをしてるんですか」

前のドアを開けて教室に入つてくるなり、優果が席に座つていないポニー・テールの女子生徒を田ぞとく見つけた。彼女から目をそらす、ドアを閉める。

「もつチヤイムは鳴りました。席に着きなさい」

優果はコナンとしゃべっていたポニー・テールの女子を軽く睨み、低い声で告げる。

「す、すみません……」

普段、哀と歩美以外の生徒には温厚な態度で接する優果だが、今回ポニー・テールの女子にはなぜか哀たちと同じような態度で接した。

( あの子が江戸川君に近づいたから、気に入らなかつたのね )  
遠くからその様子を見ていた哀は、優果の不機嫌そうな顔を見て  
他の人に気づかれないよう静かに笑つた。

「じゃあこの問題を 江戸川君」

「はい」

優果が担当する四時間目の数学の時間も、終盤こそしかかる。指  
名されたコナンは席を立ち、黒板に難しい数式を書き連ねていつた。

「正解です。よくできましたね」

優果はコナンに向かつてこいつりと微笑んだ。昨日の歩美のこと  
について問い合わせただしたことなど全く気にしていないような態度だつ  
た。

「じゃ、この問題は 灰原さん」

哀は無言で席を立ち、黒板に数式を書いたあと、また何も言葉を  
発さずに席に戻つた。

「 はい、正解です」

コナンのときよつはつべりーネンの低い声で告げる。 優果は、  
コナンのことが好きだ。

（全く、教師が生徒に恋をするなんて……）

今の教育現場はどうなっているのだ。教師と生徒の恋愛（しかも教師の一方的な）、教師の生徒への脅し。本当に信じられない世の中になったものだ。

「それじゃあ、次の数学の時間はテストをやります。みなさとちやんと勉強してきてくださいね。じゃあ、号令お願いします」

「こいつものとおり笑顔で言ひ優果の顔を、コナンは凝視していた。

挨拶が終わると、優果はこいつものとおり教材を持って教室を出た。 哀は、教室を出る前に優果が「コナンに田配せのよつなのものを見たのを見た。

（ 何？）

哀が疑問に思つてゐると、コナンが教室を出ようとしていた。

（ ちょっと、まさかあの人についていく気？）

怪しい。怪しそう。

「ちよ、江戸 」

哀は、「コナンを止めるため彼を追おうとした。だが、途中でコナンと田が合い、哀が口パクで「なにがあるわよ」と訴えると、コナンはそれに「わかった。でも大丈夫だから」と返した。

そうして哀から視線をはずすと、優果についていくように教室から出て行つた。

( 本当に、大丈夫なのかしら? )

哀は、優果とコナンが消えていった教室のドアを、じっと眺めていた。

Rukaです。

ここまで読んでください、ありがとうございます。

10月1日に、私の好きな本の6巻が発売されます！

楽しみだ～

早速明日本屋に買いに行きます！！

次回もよろしくお願ひします。

「あ、元太！ はよ～！！」

「おう、高志。昨日はどーもな。ちゃんと先生まけたか？」

なんだか高志は今日の午前中歯医者にいってたらしく、昼休みに登校してきた。

「え？ あーうん、びみょー」

「びみょー？」

元太は不思議そうな顔をした。 高志は、話を煙にまくことはかなり多い。その彼が「びみょー」と言つたといふことは、バレたか？

「あ、もしかしてバレちつた？」

「うーん、ばれた、かも？」

二人でその話の話題をしていると、周りにいた他の生徒達がわんさか寄ってきた。

「そうそう、元太が帰つたあと、あの優秀つて教師超怖かつたんだぜ！？」

「なんか上原に向かつて超言い返してたし」

「高志もそれにまた言い返すから、もつ教室中が一人の言い合いで注目するわけよ」

「で、こでじやー授業はじまんねーなーってことで、無理矢理言い合いが止められて、きまずーい雰囲気の中で授業がはじまつた、つーことですよ」

「超やばかったんだぜ、昨日」

クラスメイト達が口々に言つ。元太がとりあえずわかつたのは、昨日優果と高志が自分が早退したことについてもめで、「超やべかつたーーー」とこつことだつた。

「やうなんだ。 つていうか、お前ら前まであの優果つて教師の」と『やべえあの人超いいんだけビー』つて言つてなかつたつけ?」

元太がそう聞えば、次々に周りがしゃべりだす。

「あー。前はな。でも、今はもう無理。あのおばさんダメ。昨日の件で好感度下がりまく」

「そうそう、前まで『優しい・若い!・美人!』で三拍子そろつてたけど、今じゃ『ウザイ・ババア!・キモイ!..』になつてるからなー」

「眉間に皺寄つてたし。怒つたときの態度がまたうざいわ」

前まで高評価だったのに、一日でこんな変わるもんなのか、とか

思いながらも、元太はみんなの愚痴を聞いていた。

「元太」

「あ？」

クラスメイトがわーわー騒いでいる中に、高志の落ち着いた声が耳に入ってきた。

「なんだよ？」

「お前、六組の江戸川コナン、灰原哀、吉田歩美と仲いいだろ？」

「え？ わう、まあ。小学のときからの付き合いだし」

「 気をつけたほうがいいぞ」

急に低く真剣になつた高志の声に、元太は少し戸惑つ。

「？」

「あの優果とか言つ教師、噂によると江戸川コナンのことが好きらしい」

「……はあ？」

元太は拍子抜けした。 まつたく、コイツは。急に真剣そくな

声出すから、どんな重要な内容かと思えば、そんなことか。

「なんだそれ？ 噂だろ、う・わ・せー まじに受け止めるなよー。」

「…………」

「教師が生徒に恋するなんて、ありえないだろー」なんて言つて、元太に、高志はしつそり溜息をついた。

・ · ·

「灰原さん、ちよつといい？」

「ナソンと優果がどこかへ行つてから数分後、唯が哀に声をかけてきた。

「 なに？」

哀は今すぐ機嫌が悪いらしく、唯を思い切り睨みつけた。

「あのねー、江戸川君と優果先生、付合つてらしーよ」

「あ、そう」

哀の素つ気ない反応に、唯は不満そつな顔をした。

「 なに、驚かないの？」

「別に」

哀の飄々とした態度に、唯はムキになつた。

「な、なんなら証拠を 」

「大竹さん」

気持ちが高ぶつて声が上ずる唯とは反対に、哀が冷静な声で告げた。

「あなた、誰に『優果とコナンが付き合つている』って言つて言われたのかしら?」

哀の鋭い一言に、唯はぐつと詫まる。

「や、それは……」

「優果にでしょ?」

哀の的を射抜いた一言に、唯は思わずわかりやすくハツと反応してしまつ。

「その様子だと、当たるのよつね」

「…………」

哀は、無言のまま立つて居る唯のポケットからスッとケータイを抜き取つた。

「中、見るわよ」

「…………」

無反応な唯を放つて、哀はケータイを開いた。すると

「……ロック、ね」

哀の手が止まる。ロック。

「ど、ど、ど、ロックがかかつてると中が見れないでしょ？」

哀がロックを見て困っている様子を見ると、唯は勝ち誇ったように笑った。

だが哀の困った顔も一瞬で終わると、何かの文字を入力し始めた。

「 あの人 の誕生日は、と」

「…………？」

唯のケータイのパスワードは四桁の数字を入れるようになっていた。四桁の数字といえば、だいたい自分の誕生日 もしくは好きな人の誕生日 を入れるはず。

唯は「ナンのことが好き。となるとここに入る数字は 。

「 0504……つと」

哀は、口に出しながら文字を入力した。

( つて、いまどき誕生日をパスワードに設定するわけが )

哀は自分で入力した数字に呆れながら、ケータイのパスワード認証画面で、決定ボタンを押した。

「……え？ 嘘」

決定ボタンを押すと、パスワードが解除された。

暗証番号が、

当たっていたのだ。

「……」

唯は俯き、悔しそうな顔をする。哀は顔には出さなかつたが、内心「いくらなんでもわかりやすすぎるのでしょ」と呆れ果てた。

お久しぶりです。

最近まゆ毛が抜けて困っているRukaです。

今回は、サブタイトルを英語表記にしてみました！  
なんか、かつこよくないですか？？

内容は、題名のとおりパスワードについてです。

最後まで読んでくださった方、ありがとうございました。  
次回もよろしくお願いします。

哀が暗証番号を入力している、ちょうどその頃。

「コナンと優果は、二階の図書室に来ていた。昼休みなどは大勢の生徒が訪れ、放課後もぼちぼち人が来るが、それ以外は静かなものである。」

優果はその静かな空間の中で口を開いた。

「江戸川君、私が昨日言ったこと覚えててくれたのね。嬉しいわ」

「先生、僕に何の用ですか?」

昨日、コナンが哀と職員室に乗り込んで優果を問いつめた後、コナンは優果に「この紙に書いてある時刻にこの場所に来て」と言われていた。工藤邸に帰つてからコナンが制服のズボンのポケットを探ると、メモ用紙のような紙に「明日の数学終了後、図書室で」と書いてあつた。

「まあ、そんなに焦らないで。ちょっとお話でもしましょう」

優果は不気味に笑つとコナンに近付いてきた。

「ねえ、江戸川君、一人つきりの時はコナンでいいかしら?」

「…………。エウル、『元田』

「ナンがそう返事をすれば、優果は嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあ、『ナンも私のこと』『優果』って呼んでね？」

優果がにつこり笑う。この笑みを向けられたのがコナン以外の男子だったら、みんな騙されてしまいそうな笑い方だ。

「それ、強制ですか？」

「うーん、まあそうね」

「……でも、僕は先生には名字で先生をつける呼び方って決めてるんで」

「ナンが言い終わると同時に、四時間目開始のチャイムが学校に響いた。チャイムが鳴り終わると優果が口を開く。

「あら、わうなの」

それは残念だわ、と囁き、優果は唇を妖艶に歪ませながらひりこナンに近づいてきた。

「なこするんですか」

「やだ、もつ『ナン』たら。わかってるへせ」

「すみませんけど、教師と教え子の関係を外れるような行為は犯罪ですよ」

「コナンは優果を睨みつけながら脅す。

「 あなたのよくまわる口、塞いであげるわ

優果はコナンの肩を掴むと、唇を寄せてきた。

「私、四時間目は授業ないの。だから、ゆっくり楽しみま

優果の声が途中で途切れる。コナンは優果が気絶したことを確認すると、腕の構えを解いた。優果はコナンに覆い被さるようにして寝ている。

「バー力。昨日あんな紙渡されて、なんにも用意なしで図書室に乗り込んでくるわけねーだろ」

「コナンは、時計型麻酔銃の蓋をパタンと閉じた。

「えーっと、あとはコイツが歩美を脅した証拠をみつけねえとな。やっぱケータイを見るのが一番 」

「コナンは優果のスカートのポケットからケータイを抜き出す。

「えーっと、ロックかかってるよ……。まいったな。なんて入力すればいいんだ?」

「 その必要はないわ

「うわー?」

「ナンが人の声に驚いて図書室の入り口を振り向くと、哀が立っていた。

「なんだ、灰原かよ。脅かすなよな」

「悪かったわね」

「コナンは哀が手に見慣れぬケータイを持っているのに気がついた。

「それは？」

「ああ、このケータイ？ これは、優果の共犯者のものよ」

「共犯者？」

不思議そうに哀の言つた言葉を反復するコナンに、哀は持つていたケータイを渡した。

「大竹唯。彼女も、優果と組んで歩美を脅そうとしてたみたい。未遂だつたけどね」

「コナンがケータイのメールボックスを開くと、そこには優果と唯の計画の内容が書かれていた。

「こいつら、俺たちを脅そうとしてたのか？」

「そう。まあ正確に言えば私と歩美の「一人だけね」 哀は大仰に肩をすくめてみせた。「この二人、江戸川君のことが好きだったのよ。で、江戸川君にもつとも近い女子を消そうとした」

「ナンがつゝと顔をつきりせる。 女とこう生き物は恋ひし。  
い。

「ナンの表情を見ると、哀は首を不思議そつに傾げた。

「まあ消すつて言つても、組織がやるよつた消すではなくて、  
氣を病ませて学校を休ませるみたいなものだつたらしけど」

「ナンの顔のつきつを勘違いしたのか、哀が訂正する。

「ちなみに、唯も麻酔銃で眠らせといたわ。まあ、さすがに二階に  
ある図書室までは運んでこれなかつたから、一階の階段のところに  
置いておいたけど」

言ごながら図書室のドアの入り口付近を指す。

「ところどりで、Jの証拠もつて職員室に行きましょつ?」

「やうだな

「ナンと哀は一階の階段に置かれていた唯と麻酔銃で眠らされた  
優果を置いて、職員室に向かつた。

・

「 と、いづわけで、優果は退職になると想つ。唯は自分血を謹  
慎か退学か どちらかだな

・

・

・

「コナンと哀、元太は、学校が終わつた後三人で歩美の家に行つた。歩美に、今日優果の悪事を暴いたことを伝えて安心させるためだ。

「そりなんだ。ありがと、コナン君、哀！」

少々気が病みがちになつていた歩美も、コナンと哀の報告を聞いてもとの明るさが戻つたようだ。

「今だから言えるけど、あの人、私を脅してきたんだよ。『私の言うことを聞かないと、小嶋元太の進学を邪魔する』とか『江戸川コナンと学校で口を利くな』とか『江戸川コナンに女子を近づけるな』とかいつて

「やつぱり彼女、江戸川君のことが好きだったのね」

哀が告げる事実に、元太は驚愕した。

「まじかよ！？ 教師が生徒好きになるつてありなのか！？」

話の中心人物 江戸川コナンはハハハ、と乾いた笑いを漏らす。すると、歩美が突然口を開いた。

「あ、ねえねえみんな、五月四日のパーティーのこと決めよつよー！」

「ああ、そうね。もう一週間切つたし」

「コナンと元太は、はつとした。

優果の件があつて、すつかり忘れていたが、そうわれれば今日か

ら約一週間後はコナンの誕生日だった。哀とコナンの仲直り祝いも兼ねて、阿笠邸でパーティーをしようと四月のはじめごろから計っていたのだった。

「歩美、買出したかどりつかる？」

哀の疑問に歩美は元気よく答えた。

「せりやもちろん、みんなで買出し行こー。」

「じゃあ今度の休みにでも、近くの店に行きましょうか？」

「ううん、コナンと元太から『えつ』と声があがる。」

「ちょっと待つてくれ灰原、俺、サッカーの練習が……」

「おい、俺も柔道の練習が……」

「二人とも、もちろん行くわよね？」

せっかく歩美が元気になつたのだ。しかも、みんなで買い物に行くのをとても楽しみにしている。コナンと元太の二人が一緒に行かないとなると、歩美はかなり落ち込むはずだ。そう考えた哀が、コナンと元太を逃すはずがなかつた。

「…………はい」

「も、もちろん行きます…………」

「コナンと元太は答えながら背に冷や汗が伝うのを感じた。　哀

の笑顔が、怖い。

「じゃ、詳しいことは私と歩美で決めるから、あなたたち一人は帰つていいわよ。後で連絡するわ」

「二人とも、ばいばい」

哀の恐怖に怯えていた二人だったが、最後の歩美の笑顔に癒されて、無事帰つていったのだった。

みなさん、お久しぶりです。

えーっと、すみません。かなり間があきました。  
作者の自分も、前に何を書いていたか忘れてしまつて、いのところ  
があるので、矛盾点などあつたら言つてください……。

話は変わりますが、もうすっかり冬ですね。

雪が降りますよ（興奮）――！

雪は白くて綺麗でふわふわして好きです。

この小説の連載を始めたころはちょうど夏の真っ盛りで、物語の  
季節と実際の季節がそんなに開いていなかつたんですが、気づけば  
小説の中の季節はまだ4～5月の間で、現実は12月です。

私は冬があまり好きではない（氷が滑るので、転ぶと痛い + 周  
りの人の困が……）ので、コナンたちの季節が羨ましいです。あ、  
でも4月は花粉が……。

ここまで読んでください、ありがとうございました。  
次回もよろしくおねがいします。

歩美たちと買い物に行くと約束した、日曜日。

コナンと哀、元太、歩美、光彦の五人は、阿笠邸の近くにあるスパーク花にパーティーの買い物にきていた。

コナンは眠そうに、元太は部活にいけなくて残念そうに、光彦は久しぶりに見る哀の顔を見て少し顔を赤くしている。

哀と歩美が買い物をしている間、コナンと元太と光彦が荷物もちをしていた。

午前九時半。一時間程度でパーティーの食料を買い終わると、歩美が口を開いた。

「ねえねえ、まだ時間あるし、ちょっと服とか文房具とか見ていかない？」

歩美の提案に、元太とコナンはぎょっとした。

「私はいいけど」

哀の答えに、コナンはしぶしぶ頷く。

「じゃあ俺も……」

本当は推理小説の続きを読んでいたかったのだが、哀が外にでているといつのに自分が家に帰るわけにはいかない。

（変な男どもから守んなきやだな……）

「元太君と光彦君は？」

無邪気に聞いてくる歩美に、元太は申し訳なさそうな顔をした。

「わりい、歩美。俺大会近いから、午後から部活行くわ」

両手を合わせて詫びる元太に、歩美は少し落ち込んだ。

「やつか……。じゃあしかたないね。光彦君はどうする？」

「僕は特に予定がないので、一緒に行きます」

光彦の返答を聞くと、歩美は嬉しそうにした。

「よかつた！ じゃあ、やつやく買こにこい！」

「言つが早いが走り出やつとしていた歩美に、哀が声をかけた。

「歩美！ ちょっと待つて」

「え？ なに？」

訝る歩美に、哀が発言する。

「江戸川君と小嶋君と円谷君の荷物を博士の家に置いて、それから出かけましょ」

歩美はハッとした。コナンと元太と光彦は、たくさんビニール袋を手から提げている。それに対し、歩美と哀は自分のバックしか持つていなかつた。

（……私、自分のことばかりで、コナン君たちのことを考えてなかつたかも……）

「コナンと元太はともかく、光彦は荷物が重いのだろう、辛そうな顔をしている。

歩美は口の浅はかさを後悔しつつ、哀の提言に賛成した。

「そうだね、その方がみんなも楽だし。ごめんね、三人とも。私、自分のことしか考えてなくて……」

「あ、いや、別に、俺たちのことなんか気にしないでいいぜ」

コナンが歩美を慰めると、光彦と元太 ではなく、なぜか哀が首を縦に振つていた。

「本当に江戸川君の言うとおりよ。歩美、こんな人たちのことなんて気にしなくていいの」

「…………え？」

不審がる歩美に、哀はさりげと言つた。

「私が阿笠邸に寄つてからつて言つたのは、駅前に新しくできたショッピングモールに行きたかつたからよ」

「…………え？」

「駅前にいくには、阿笠邸を通るでしょ？だから、ついでに荷物を置いていけばいいかなつて思つただけよ」

「そこまで『ついで』を強調しなくても……」

「ナンの略を無視して、哀は続ける。

「だから、江戸川君たちのことなんか気にしないで、一人で買い物を楽しみましょ？」

「おこー。」

「ナンはつひこだが、哀はそれすらも無視する。

「ね？」

「…………うんー。」

勢いよく返事をする歩美に、哀は微笑んだ。

「じゃあ、早く阿笠邸に帰りましょ？」

「そうだね。ほら、光彦君と元太君とナン君、早く来ないとおいてつちやうめー。」

「おこちゃまと灰原ー！」

後ろからコナンが追いかけてきて哀の腕をつかまえる。

「何？」

「おまえ、黙つて聞いていや……」

それから一人の痴話喧嘩が始まり、どんどんビートアップしていく。

歩美はそんな二人の様子を微笑みながら見守っていた。

（コナン君、今日は私の勝ちだね）

歩美は心中で呟いた。

（哀は、本当はコナン君や元太君たちのことを思つて、駅前のショッピングモールに行こうって言つたんだよ）

一人の口喧嘩をきく。どうやら、コナンの方が哀におそれ氣味のようだ。

（哀の言つたことの本当の意味がわからなつよつじや、まだ哀はあげられないな）

歩美は心中で呟いて、自分の言つたことの意味に気がつく。

（あれ？ なんかこれつてお父さんみたいじゃない？）

……自分が哀のお父さん。

そこまで考へて、歩美はふと吹きだした。

「歩美？ ビラしたの、一人で笑つて」

そこへ、ビラヤリ口喧嘩でコナンに勝つたらしい哀がやつてきた。後方で、元太と光彦がコナンを慰めているように見える。

（やういえば、いつも五人のとき、私と元太君と光彦君が前で、哀とコナン君が後ろだつたな……）

今は自分と哀が前で、コナンと元太と光彦が後ろ。なんだか違和感がある。珍しい。

「あ、なんでもないよ」

歩美が笑つていうと、哀は「やういへー」と首を傾げたが、それ以上追求してこなかつた。

いつもと並び順が違つて多少の違和感はあつたが、哀と二人でいられるなんて嬉しいなあと素直に思つた。

（やういえば、コナン君と哀つて、結局あのあとビラなつたんだろう）

あのあと、ところは、歩美が哀を後押しして、コナンに好きと言えと言つたときだ。

（哀つて、たとえ付き合つたとしても、歩美、私江戸川君と付き合

うことになつたの』とか言わなそりだしなあ……。でも、付き合つてなかつた場合、私が『コナン君と付き合つてゐるの?』って聞いたらまあ、『よつな……』

「歩美？ どうしたの？」

こつもしゃべつてくる歩美が静かなので心配になつたのだらう。哀は氣遣わしげに歩美を見てくる。

「あ、大丈夫。ほんとになんでもないから」

パーティーのときにそれとなくきいてみよつ、と考えながら、歩美たちは荷物を置くために阿笠邸に向かつた。

こんなにまだ。

「永遠に……」26話をお届けです。

やつと優果の話から脱出！ わ〜い  
さらに、冬休み突入！ わ〜い

最近うれしいことが続いています。楽しいなあ。

もうすぐお正月ですね！

松前漬けが食べられますよ！ おいしい……！！

甘酒も飲めるし、松前漬けも食べられるし、スルメもあるし、お

正月つて最高ですね！

次回もよろしくお願いします。

「わあ、広い！」

「大きいですね……！」

米花駅前のショッピングモールに着いた歩美と光彦の第一声がこれだ。

二人の言つとおり、かなり大きなショッピングモールだった。品揃えも豊富で、客がたくさんいる。

「ナン、哀、歩美、光彦の四人は、阿笠邸に荷物を置いて、部活にいくという元太と別れた後、「服や文房具を見たい！」という歩美の希望にそつて、最近新しくできたという米花ショッピングモールへとやつてきたのだ。

「わ、ねえ見て、哀！ ここの服、すくかわいくない？」

「そうね」

歩美と哀はさつそく服を吟味している。が、二人のいるところは他に女性しかいなかつたので、コナンと光彦は入りにくい。

「……コナン君、あのベンチで休んでましょ！」

近くのベンチを指をして、「あそこからなら灰原さんと歩美ちゃんの様子も見えます」という光彦の意見にコナンも賛同し、二人でベンチに腰掛ける。

「人が腰掛けたベンチの近くにはアイスクリームやらジュースやらを売っている店があつたので、他にもベンチに座つて休んだりジュースを飲んだりアイスを食べたりしている人がいた。

「…………」

「コナンはなんとなく居心地が悪くて身じろぎした。

ベンチに座つているのはほとんどがカップルだ。親しげに話したり、ジュースを飲みあつたりしている。

が、コナンの隣にいるのは女子ではなく、光彦だ。

「…………」

休みたかったのでベンチに座つたのだが、野郎と一人といつのはちょっと嫌だつた。唯一救いだつたのは、ベンチの長さが長いので、二人してくつついて座らなくて済んだということくらいだ。

「コナンは隣の光彦も自分と同じ心境だつと思い、彼の方を向いた。

「おい、光彦……」

「こはちょっといざらじから、立たねえか？」と言おうとしたコナンだが、光彦はあまりベンチで野郎が一人ということを気に

していなこりしい様子だった。コナンが声をかけたことにも気づかないらしく、食い入るよつにビンカを見つめている。

「コナンが光彦の視線を追つて、そこには哀と歩美の姿があった。

（……光彦、まだあこいつのことを……）

正直コナンは、光彦はもう諦めたのかと思っていた。学校も違うし、光彦は新しい場所で好きな子を見つけたのではないかと。

だが、その考えは違つたようだ。

「……「コナン君」

光彦が静かな声音を発する。あまりにも落ち着いた様子だったのでも「コナンは内心驚いたが、そのことを表情に出さずに訊く。

「なんだ？」

光彦はまだ哀と歩美の方を見つめている。正確には、歩美ではなく哀を。

「歩美ちゃんって、灰原さんのこと、呼び捨てで呼ぶよつになつたんですね」

「……ああ

自分や元太にとつてはもう慣れてしまつたことだが、光彦にとつては新鮮だったようだ。

「灰原さん、コナン君としゃべるよつになつたんですね」

「の問題には、すぐには答えられなかつた。一瞬詰まつてから、返答する。

「……、ああ

不自然な間を感じたのか、光彦は哀から視線をはずしてコナンを見た。

その妙に冷静な瞳にコナンはたじろぐ。

「……よかつたですね」

「…………」

「コナンは無言を通り、この質問には、答えられなかつた。

「灰原さん、コナン君と話してくるとき、嬉しそうですね」

「…………」

「付き合つてゐるんですか?」

「…………」

光彦の眼光がコナンを射抜く。コナンの顔がさつと変わつたのを、光彦は見逃さなかつた。

「やつですか……」

今までの冷静な聲音とは一変し、光彦は悲しみを含んだ声で言った。

「やつぱり灰原さんは、コナン君なんですね……」

コナンは光彦の囁きを黙つてきいていた。

「……僕は、ずっと灰原さんを想つてきたのに……」

光彦は俯いた。

「それなのに、灰原さんをずっと想つてきた僕より、最近灰原さんのことになりだしたコナン君の方を、彼女は選んだんですね……」

「……」

光彦の悲痛な咳きに、コナンも頭を伏せる。

「コナンくん、光彦くん！」

二人が同時に顔を上げると、歩美が手招きをしていた。

「……歩美ちゃんが呼んでますね。行きましょうか、コナン君」

「ああ」

首肯すると、コナンと光彦は歩美たちのいるほうへ歩いた。



あけましておめでと「ひ」やこます。

冬休みです……もつすべ終わるナビ……。

冬休みは終わっても宿題は終わらない……。

こんこひは。いろいろもの（宿題とか、宿題とか、宿題とか）に追われているRukkaです。逃げ切れません。

「永遠に……」27話目です。私の名簿番号です、たしか。

最近、我が母上に「あんた若年性アルツハイマーじゃないの？？」と言われるほど物忘れが激しいです。

ですが先ほどインターネットで検索したところ、若年性アルツハイマーとは40代～65歳までに発症するアルツハイマー病、なのだそう。

お母さん、まだ私40歳なつてないです。

……と、お母さまに教えてさしあげたところ、「じゃああんたは若年性アルツハイマーじゃない？」と返されました。

……言い返せません。せっぱりこいつの時代も母上は強いです。  
ここまで読んでくださった方、ありがとうございました。  
次回もよろしくおねがいします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5380u/>

---

永遠に.....

2012年1月5日22時47分発行